

収蔵資料
調査報告書

25

吉田初三郎関係資料
下

2023.3

宇治市歴史資料館

収蔵資料 調査報告書

25

吉田初三郎関係資料
下

目次

- 1 吉田初三郎関係資料について
- 2 吉田初三郎関係資料目録1 原画・鳥瞰図
(以上、『収蔵資料調査報告書24
吉田初三郎関係資料 上』に掲載。)
- 3 吉田初三郎関係資料目録2 絵はがき等 …… 2
- 4 吉田初三郎と大塚コレクション …… 18
- 5 資料紹介 …… 63
 - 1 吉田初三郎「如何にして初三郎式鳥瞰図は生まれたか？」
 - 2 真琴清之助「名所図絵の出版に就て」
 - 3 『吉田初三郎先生作日本全国名所図絵 蒐集目録』
【参考】『キング』連載「日本全国名所絵巻」

3 吉田初三郎関係資料目録2 絵はがき等

凡例

- 1) 本目録は、当館が所蔵する吉田初三郎関係資料のうち、絵はがきなど鳥瞰図以外の目録である。鳥瞰図については「吉田初三郎関係資料目録1 鳥瞰図」に掲載した。
- 2) 配列は、絵はがき、図書・冊子、その他に分けた上で、年代等を勘案しつつ適宜配した。
- 3) 目録の体裁は下記のとおり。

No.	受入	資料名	作成者等	年代	寸法	備考
-----	----	-----	------	----	----	----

- No.) 本目録上の番号。番号は、鳥瞰図から続けて付した。
- 資料名) 表題を記した。表題が無い場合は、内容から適宜付した。
- 作成者) 奥付等に記された作成者等を記した。
- 年代) 奥付に記された年代を記した。奥付が無い場合は資料内の表記等から推定し()内にしめした。数字はアラビア数字に改めた。
- 寸法) 原則として縦×横、本来箱入りで厚みのある『鉄道旅行案内』のみ縦×横×厚さを記した。単位はいずれもミリメートルである。
- 備考) その他の特記事項を記した。数字はアラビア数字に改めた。参考のため、原則として右ページに画像を掲載し、「→画像」としめした。紙幅の都合により、画像の掲載順を変更したり次頁に掲載したことがある。また、資料名を一部省略したり、同版等のため掲載を省略したことがある。同版省略の資料は、「(掲載資料No.)同版」とした

■絵はがき

No.	受入	資料名	作成者	年代	寸法	備考
191	2349 -19	遊覧架空索道	京都電灯株式会社経営／観光社 印行		142 × 91	「郵便はがき」 →画像
192	2349 -20	叡山ケーブルカー	京都電灯株式会社経営		143 × 92	「郵便はがき」 →画像
193	2349 -21	Beautiful Japan 美の 国日本	JAPANESE GOVERNMENT RAILWAYS : JAPAN TOURIST BUREAU／観光 社印行		144 × 91	「郵便はがき」 →画像
194	2349 -22	ライン下り・松茸狩	観光社印行／ライン遊園地北陽 館 土田遊船事務所		142 × 92	「郵便はがき」 →画像
195	2349 -23	伊勢神宮 おかげまいり の図	日本ライン観光社印行		142 × 92	「郵便はがき」 →画像
196	2349 -25	日満連絡 日本海一宮津 港(航路図)	宮津港期成同盟会／日本ライン 観光社印行	(昭和9年1月 15日／1934)	141 × 90	「郵便はがき」 吉田清之助年賀 状(未使用) →画像
197	2349 -26	日満連絡 日本海一宮津 港(橋立と舞妓)	宮津港期成同盟会／日本ライン 観光社印行	昭和9年(193 4)	141 × 90	「郵便はがき」 →画像
198	2349 -27	日本海中心時代来る	北日本汽船株式会社		141 × 91	「郵便はがき」 →画像
199	2350 -75	朝鮮の妓生	観光社印行	(昭和6年2月 11日／1931)	143 × 90	「郵便はがき」 昭和6年2月11日 付観光社より個人宛 →画像



191 遊覧架空索道



192 叡山ケーブルカー



193 Beautiful Japan 美の国日本



194 ライン下り・松茸狩



195 伊勢神宮



196 日満連絡(航路図)



197 日満連絡(橋立と舞妓)



198 日本海中心時代来る



199 朝鮮の妓生

No.	受入	資料名	作成者	年代	寸法	備考
200	1661	御絵はかき(タトウ)			180 × 97	→画像
	1661 - 1	唐津 西の浜海水浴場	唐津市役所発行/京都祇園・観光社印行		143 × 90	「郵便はがき」 →画像
	1661 - 2	唐津 舞鶴公園・鏡山及び虹の松原	唐津市役所発行/京都祇園・観光社印行		145 × 91	「郵便はがき」 →画像
	1661 - 3	唐津 虹の松原	唐津市役所発行/京都祇園・観光社印行		144 × 91	「郵便はがき」 →画像
	1661 - 4	唐津 観音の瀧	唐津市役所発行/京都祇園・観光社印行		144 × 91	「郵便はがき」
	1661 - 5	唐津 七ツ釜	唐津市役所発行/京都祇園・観光社印行		143 × 90	「郵便はがき」 →画像
201	1662	景勝の鳥羽(タトウ)			174 × 103	→画像
	1662 - 1	景勝の鳥羽(昼景)	鳥羽観光協会発行/京都祇園・観光社印行		90 × 141	「郵便はがき」 →画像
	1662 - 2	景勝の鳥羽(夜景)	鳥羽観光協会発行/京都祇園・観光社印行		90 × 141	「郵便はがき」 →画像
	1662 - 3	鳥羽名所風光図	鳥羽観光協会発行/京都祇園・観光社印行		90 × 141	「郵便はがき」 →画像
202	1663 - 1	夜の函館港	函館市役所/京都祇園・観光社印行		91 × 142	「郵便はがき」 →画像
	1663 - 2	新緑の函館公園	函館市役所/京都祇園・観光社印行		90 × 142	「郵便はがき」 →画像
	1663 - 3	函館八幡宮の朝の雪	函館市役所/京都祇園・観光社印行		90 × 141	「郵便はがき」 →画像
	1663 - 4	五稜郭の桜	函館市役所/京都祇園・観光社印行		91 × 141	「郵便はがき」 →画像
	1663 - 5	函館音頭	函館市役所/京都祇園・観光社印行		91 × 141	「郵便はがき」 →画像
203	2350 -60	郡上八幡(絵はがきタトウ)	京都祇園・観光社印行/岐阜県郡上郡・八幡町役場		178 × 103	→画像次頁
	2350 -60 - 1	愛宕公園桜雲	京都祇園・観光社印行/岐阜県郡上郡・八幡町役場		90 × 141	「郵便はがき」 →画像次頁
	2350 -60 - 2	吉田川垂釣	京都祇園・観光社印行/岐阜県郡上郡・八幡町役場		90 × 141	「郵便はがき」 →画像次頁



200 御絵はかき



唐津 西の浜海水浴場



唐津 舞鶴公園



唐津 虹の松原



唐津 観音の瀧



唐津 七ツ釜



201 景勝の鳥羽



景勝の鳥羽(昼景)



景勝の鳥羽(夜景)



鳥羽名所風光図



202 夜の函館港



新緑の函館公園



函館八幡宮の朝の雪



五稜郭の桜



函館音頭

No.	受入	資料名	作成者	年代	寸法	備考
203	2350 -60 -3	東殿山吐月	京都祇園・観光社印行／岐阜県郡上郡・八幡町役場		90 × 141	「郵便はがき」 →画像
	2350 -60 -4	八幡城清雪	京都祇園・観光社印行／岐阜県郡上郡・八幡町役場		90 × 141	「郵便はがき」 →画像
	2350 -60 -5	八幡町全図	京都祇園・観光社印行／岐阜県郡上郡・八幡町役場		90 × 141	「郵便はがき」 →画像
204	2349 -24	紀元二千六百年記念日本万国博覧会会場	紀元二千六百年記念日本万国博覧会／光村原色版印刷所印行		141 × 91	「郵便はがき」 →画像
205	2349 -28	(絵はがき 紀元二千六百年記念日本万国博覧会タトゥ)	東京朝日新聞	(昭和13年／1938)	185 × 95	「祝東京朝日新聞創刊五十周年」、裏面「抽選券付回数入場券第二回売出し予告」 →画像
	2349 -28 -1	紀元二千六百年記念日本万国博覧会肇国記念館	紀元二千六百年記念日本万国博覧会発行	(昭和13年／1938)	91 × 141	「郵便はがき」 →画像
	2349 -28 -2	紀元二千六百年記念日本万国博覧会会場	紀元二千六百年記念日本万国博覧会発行	(昭和13年／1938)	91 × 140	「郵便はがき」 →画像
206	2350 -61	御慰問(絵はがき袋)	名古屋・観光社印行／瀬戸市銃後奉公会		163 × 98	→画像
	2350 -61 -1	社頭の千人針	名古屋・観光社印行／瀬戸市銃後奉公会		89 × 139	「郵便はがき」 「軍事郵便」 →画像
	2350 -61 -2	銃後婦人の祈り	名古屋・観光社印行／瀬戸市銃後奉公会		89 × 139	「郵便はがき」 「軍事郵便」 →画像
	2350 -61 -3	日参団少年少女の赤誠	名古屋・観光社印行／瀬戸市銃後奉公会		89 × 139	「郵便はがき」 「軍事郵便」 →画像

■図書・冊子

No.	受入	資料名	作成者	年代	寸法	備考
207	788	鉄道旅行案内	鉄道省／印刷者 東京市下谷区二長町一番地 井上源之丞／印刷所 東京市下谷区二長町一番地 凸版印刷株式会社	大正10年10月5日(1921)	109 × 193 × 29	箱あり(115×195×31) 310頁 →画像次頁
208	418 -1	鉄道旅行案内	鉄道省／発行者 東京市日本橋区本石町三丁目十六番地 株式会社博文館代表者 大橋進一／印刷者 東京市下谷区二長町一番地凸版印刷株式会社 井上源之丞／発行所 東京市日本橋区本石町三丁目 株式会社博文館	大正10年10月5日、大正11年3月5日 26版(1922)	109 × 193 × 29	箱あり(115×195×31) 310頁 定価金2円50銭 207同版



203 郡上八幡



愛宕公園桜雲



吉田川垂釣



東殿山吐月



八幡城清雪



八幡町全図



204 紀元二千六百年記念
日本万国博覧会会場



205 (紀元二千六百年記念
日本万国博覧会)



肇国記念館



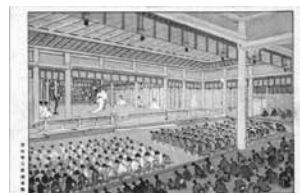
博覧会会場



206 御慰問



社頭の千人針



銃後婦人の祈り



日参団少年少女の赤誠

No.	受入	資料名	作成者	年代	寸法	備考
209	2349 -60	鉄道旅行案内	鉄道省／印刷者 東京市下谷区二長町一番地 井上源之丞／印刷所 東京市下谷区二長町一番地 凸版印刷株式会社	大正13年10月5日(1924)	109 × 193 × 29	375頁 211同版
210	1670	鉄道旅行案内	鉄道省／印刷者 東京市下谷区二長町一番地 井上源之丞／印刷所 東京市下谷区二長町一番地 凸版印刷株式会社	大正13年10月5日(1924)	109 × 193 × 33	375頁 211同版
211	789	鉄道旅行案内	鉄道省／発行者 東京市日本橋区本石町三丁目十六番地 株式会社博文館代表者 大橋進一／印刷者 東京市下谷区二長町一番地凸版印刷株式会社 井上源之丞／発行所 東京市日本橋区本石町三丁目 株式会社博文館	大正13年10月8日(1924)	109 × 193 × 33	箱あり(115×195×35) 375頁 正価金3円20銭 →画像
212	313	鉄道旅行案内	鉄道省／発行者 東京市日本橋区本石町三丁目十六番地 株式会社博文館代表者 大橋進一／印刷者 東京市下谷区二長町一番地凸版印刷株式会社 井上源之丞／発行所 東京市日本橋区本石町三丁目 株式会社博文館	大正13年10月8日、大正13年11月10日8版(1924)	109 × 193 × 33	375頁 正価金3円20銭 211同版
213	927	鉄道旅行案内	鉄道省／発行者 東京市日本橋区本石町三丁目十六番地 株式会社博文館代表者 大橋進一／印刷者 東京市下谷区二長町一番地凸版印刷株式会社 井上源之丞／発行所 東京市日本橋区本石町三丁目 株式会社博文館	大正15年7月31日／大正15年9月5日11版(1926)	108 × 192 × 33	箱あり(115×196×35) 375頁 正価金3円20銭 「鉄道線路略図」挟み込み →画像
214	2350 -78	洛西景勝記	編輯兼発行人 小林吉明／印刷人 山鹿健吉／発行所 小林吉明	大正14年4月25日三版(1925)	188 × 127	巻末に「洛西名所図絵」(大正11年10月5日大正名所図絵社)を貼付 →画像次頁
215	2350 -79	洛西景勝記	編輯兼発行人 小林吉明／印刷人 山鹿健吉／発行所 小林吉明	大正14年4月25日三版(1925)	188 × 127	巻末に「洛西名所図絵」(大正11年10月5日大正名所図絵社)を貼付 214同版
216	2349 -33	鴨川をどり	印刷兼印刷所 実業広告商事株式会社代表者 瀧井三郎／発行兼編輯人 先斗町歌舞練場	昭和3年4月1日(1928)	125 × 190	表紙初三郎画 「叡山ケーブルカー」 →画像次頁
217	2349 -34	都をどり写真帖	発行印刷兼編輯人 京都市祇園万寿小路 中神直三郎／印刷所 京都市柳馬場三条下ル 株式会社似玉堂／発行所 京都市祇園万寿小路 技芸倶楽部社	昭和2年4月1日(1927)	127 × 190	表紙初三郎画 「叡山ケーブルカー(叡山電鉄交通図絵)」 →画像次頁

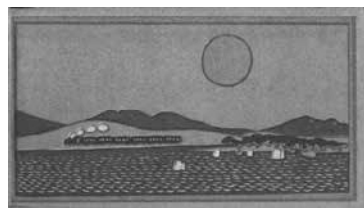
207 鉄道旅行案内



(表紙)

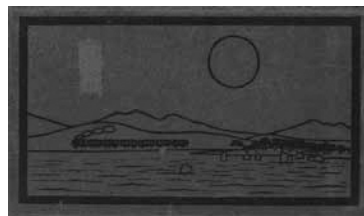


(背表紙)



(裏表紙)

(同上箱)



211 鉄道旅行案内



(表紙)

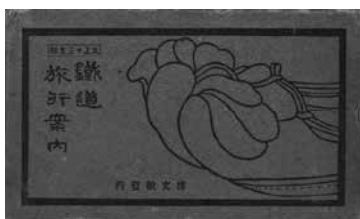


(背表紙)



(裏表紙)

(同上箱)



213 鉄道旅行案内



(表紙)



(背表紙)



(裏表紙)

(同上箱)



No.	受入	資料名	作成者	年代	寸法	備考
218	2349 -35	都をどり写真帖	発行印刷兼編輯人 京都市祇園万寿小路 中神直三郎／印刷所 京都市柳馬場三条下ル 株式会社似玉堂／発行所 京都市祇園万寿小路 技芸倶楽部社	昭和3年4月1日(1928)	129 × 190	表紙初三郎画「叡山ケーブルカー」 →画像
219	2255	都をどり写真帖	発行印刷兼編輯人 京都市祇園万寿小路 中神直三郎／印刷所 京都市柳馬場三条下ル 株式会社似玉堂／発行所 京都市祇園万寿小路 技芸倶楽部社	昭和3年4月1日(1928)	128 × 188	表紙初三郎画「叡山ケーブルカー」 218同版
220	2049 -44	大正広重物語	吉田初三郎 自宅京都市外山科村みさゞき 寓居東京市外大井町二二九／大正広重後援会 大正名所図絵社 東京市京橋区本材木町三ノ二五／京都支社 京都市上京区河原町三条上ル二丁目／顧問 鹿子木孟郎先生／会長 大瀧新之介氏	大正12年春日(1923)	188 × 130	8頁 非売品 →画像
221	2349 -45	絵に添へて一筆集	著作者 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 吉田初三郎／編纂兼印刷発行者 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社／右編纂者 稲垣有／右印刷者 真琴清之助／右発行者 前田穰／発行所兼印刷所 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社	昭和5年9月1日(1930)	187 × 129	吉田初三郎先生叢書第一輯 255頁 定価金80銭(特価金50銭の押印あり) →画像
222	2349 -46	吉田初三郎先生作日本全国名所図絵 蒐集目録	奥田卯三郎編／観光社補訂／編輯兼印刷発行者 観光社	昭和4年5月1日(1929)	129 × 231	39頁 定価一部50銭 →画像
223	2349 -47	吉田初三郎先生作日本全国名所図絵 蒐集目録	奥田卯三郎編／観光社補訂／編輯兼印刷発行者 観光社	昭和4年5月1日(1929)	129 × 231	39頁 定価一部50銭 222同版
224	2349 -48	(吉田初三郎先生作日本全国名所図絵 蒐集目録、口絵原稿)		(昭和4年／1929)	110 × 197	口絵22頁のうち20頁(12、22頁欠)
225	2350 -98	HIROSHIMA	Published by Hiroshima Publishing Company ／Recommended by Hiroshima Tourist Association	1949	283 × 180	表紙共28頁 →画像

■その他

No.	受入	資料名	作成者	年代	寸法	備考
226	2349 -39	(葉)琵琶湖遊覧御案内 LAKE BIWA ROUND TRIP 附録	太湖汽船株式会社／観光社印行	大正16年(1927)(マ)	166 × 44	→画像
227	2349 -40	(葉・叡山名所図絵正誤表)	観光社印行／京都電灯株式会社 叡山鉄道部	昭和2年春(1927)	176 × 105	→画像
228	2349 -41	(葉・叡山名所図絵正誤表)	観光社印行／京都電灯株式会社 叡山鉄道部	昭和2年春(1927)	176 × 105	227同版



216 鴨川をどり



217 都をどり写真帖



218 都をどり写真帖



214 洛西景勝記



220 大正広重物語



221 絵に添へて一筆集



225 HIROSHIMA



222 吉田初三郎先生作日本全国名所図絵 蒐集目録



226 (栗)琵琶湖遊覧御案内附録(表・裏)



227 (栗・叡)山名所図絵正誤表 (表・裏)



No.	受入	資料名	作成者	年代	寸法	備考
229	2349 -36	桓武天皇千百五十年祭記念(使用済み切符半券)	京都市交通局	1955. 4	45 × 92	図は平安神宮と市電 →画像
230	2349 -37	桓武天皇千百五十年祭記念(使用済み切符半券)	京都市交通局	1955. 4	45 × 92	図は平安神宮と市バス →画像
231	2349 -38	電車観光乗車券(京名所市電遊覧記念鳥瞰図)	京都市交通局	(昭和30年頃 /1955)	88 × 133	150円 →画像
232	2350 -110	かわぐち (市勢要覧等の表紙か)	発行所 川口市役所/発行人 川口市商工課長資延文雄/著作兼者 吉田初三郎/版權所有者 阿瀬庄太郎(以下欠損)	(昭和33年か /1958)	88 × 133	表紙画初三郎裏返し「先生関係シャシ」と大書、袋として再利用か →画像
233	2350 -22	月桂冠 壘詰の葉	株式会社大蔵恒吉商店	(昭和6年 /1931)	174 × 94	表紙に吉田初三郎画「月桂冠伏見本店景観図」をあしらう →画像
234	171 -14	観光 No.13. Oct.	発行兼編輯印刷者 愛知県丹羽郡城東村継鹿尾 広瀬春窓/発行所 名古屋市外犬山城日本ライン蘇江 観光社	大正15年9月 20日(1926)	464 × 272	全4頁 「毎月一回 二十日発行 一部金十銭」 →画像
235	2349 -56	旅と名所 観光改題第22号	発行者 愛知県丹羽郡城東村継鹿尾字氷室 前田穰/編輯者 同所 稲垣有/印刷者 同所 真琴清之助/発行所 名古屋市外犬山町日本ライン 観光社	昭和3年8月1 日(1928)	260 × 188	60頁、定価金20銭 表紙には昭和3年6月1日発行と記す →画像
236	2349 -57	旅と名所 観光改題第22号	発行者 愛知県丹羽郡城東村継鹿尾字氷室 前田穰/編輯者 同所 稲垣有/印刷者 同所 真琴清之助/発行所 名古屋市外犬山町日本ライン 観光社	昭和3年8月1 日(1928)	260 × 188	60頁、定価金20銭 表紙には昭和3年6月1日発行と記す 235同版
237	2349 -58	旅と名所 観光改題第23号	発行者 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江画室 前田穰/編輯者 同所 清水超太郎/印刷者 同所 真琴清之助/発行所 同所 観光社	昭和4年10月 10日(1929)	262 × 193	32頁 定価金20銭 →画像
238	2349 -49	観光春秋 No. 1	発行兼印刷者 愛知県丹羽郡城東村継鹿尾字氷室 真琴清之助/発行所 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社	昭和3年4月2 0日(1928)	274 × 200	4頁 一部金5銭 →画像
239	2349 -50	観光春秋 No. 2	発行兼印刷者 愛知県丹羽郡城東村継鹿尾字氷室 真琴清之助/発行所 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社	昭和3年12月 1日(1928)	266 × 197	4頁 一部金5銭 →画像
240	2349 -51	観光春秋 No. 3	発行兼印刷者 愛知県丹羽郡城東村継鹿尾字川端 真琴清之助/発行所 名古屋市外犬山町日	昭和4年8月1 日(1929)	276 × 199	4頁 一部金5銭 →画像
241	2349 -52	観光春秋 No. 4	発行兼印刷者 愛知県丹羽郡城東村継鹿尾字川端 真琴清之助/発行所 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社	昭和4年10月 1日(1929)	265 × 194	4頁 一部金5銭 →画像



229 桓武天皇千百五十年祭記念



230 桓武天皇千百五十年祭記念



231 電車観光乗車券



232 かわぐち



233 月桂冠 塚詰の菜



234 観光 No.13



235 旅と名所 22号



237 旅と名所 23号



238 観光春秋 No.1



239 観光春秋 No.2



240 観光春秋 No.3



241 観光春秋 No.4

No.	受入	資料名	作成者	年代	寸法	備考
242	2349 -53	観光春秋 No. 4	発行兼印刷者 愛知県丹羽郡城東村継鹿尾字川端 真琴清之助 ／発行所 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社	昭和4年10月1日(1929)	265 × 194	4頁 一部金5銭 241同版
243	2349 -54	観光春秋 No. 7	発行兼印刷者 愛知県丹羽郡城東村継鹿尾字氷室川端 真琴清之助 ／発行所 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社	昭和5年1月1日(1930)	267 × 191	16頁 一部金5銭 →画像
244	2349 -55	観光春秋 No. 9	発行兼印刷者 愛知県丹羽郡城東村継鹿尾川端 真琴清之助 ／発行所 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社	昭和5年6月1日(1930)	194 × 134	16頁 一部10銭 →画像
245	2350 -66	近世広重吉田初三郎先生作品頒布会内容・規約	名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社内 吉田初三郎先生作品頒布会	(昭和5年新春／1930)	235 × 632	第1回から6回(72点)の案内 →画像
246	2350 -67	近世広重吉田初三郎先生作品頒布会内容・規約	名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社内 吉田初三郎先生作品頒布会	(昭和5年10月／1930)	231 × 631	第1回から7回(84点)の案内 →画像
247	2350 -68	近世広重吉田初三郎先生作品頒布会内容・規約	名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社内 吉田初三郎先生作品頒布会	(昭和6年8月／1931)	235 × 639	第1回から11回(104点)の案内→画像
248	2350 -69	観光社在庫品目録 昭和五年九月上旬現在-(但シ頒布会用八十種ヲ除ク)	名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社内 吉田初三郎先生作品頒布会	(昭和5年9月／1930)	196 × 270	→画像
249	2350 -70	吉田初三郎先生作品頒布会第四回会員募集	申込所 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社／大阪市堺筋白木屋内 近畿旅行会		204 × 289	→画像
250	2350 -71	吉田初三郎先生作品頒布会第五回会員募集	申込所 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社		180 × 263	→画像
251	2350 -72	(第八回・第九回頒布会チラシ)	名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社		195 × 270	→画像
252	2350 -73	(吉田初三郎先生叢書第一期予約募集チラシ)	申込所 名古屋市外犬山町日本ライン蘇江 観光社	(昭和4年／1929)	269 × 194	昭和5年1月～4月刊行予定。 →画像
253	2350 -74	(観光社より個人宛封書一括)		(昭和4年／1929)		「吉田初三郎先生作品頒布会第四回会員募集」チラシ1、観光社払込票1、昭和4年2月18日付京浜電車より個人宛ハガキ1、同年4月8日付観光社出版部より個人宛ハガキ1→画像
254	2350 -76	(観光社封筒)		(昭和4年10月20日／1929)	30 × 137	昭和4年10月20日付観光社より個人宛
255	2350 -63	(観光社封筒)	観光社出版部・画室	(昭和9年12月／1934)	210 × 128	未使用 →画像



243 観光春秋 No.7



244 観光春秋 No.9



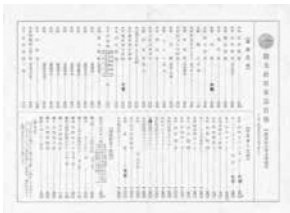
245 作品頒布会内容・規約



246 作品頒布会内容・規約



247 作品頒布会内容・規約



248 観光社在庫品目録



249 頒布会第四回会員募集



250 頒布会第五回会員募集



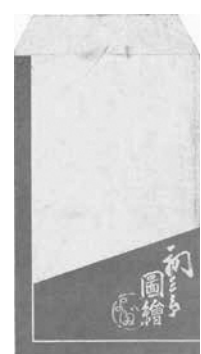
251 (第八回・第九回頒布会チラシ)



252 (吉田初三郎先生叢書
第一期予約募集チラシ)

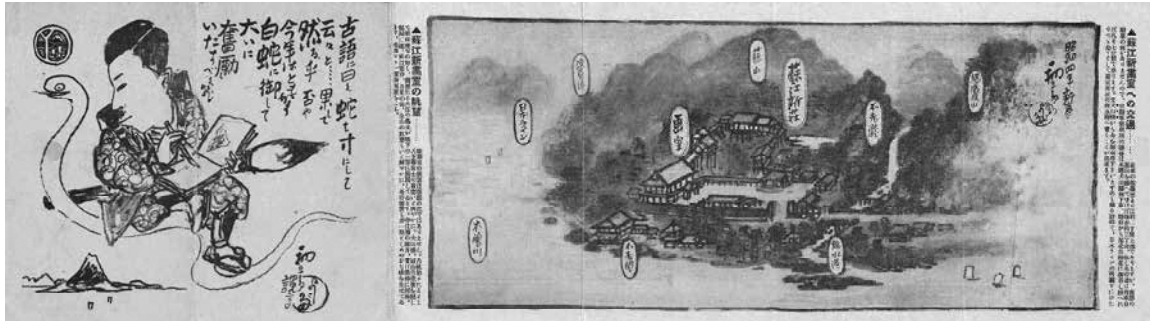


253より観光社封筒(裏)



255 (観光社封筒)(表)

No.	受入	資料名	作成者	年代	寸法	備考
256	2350 -64	(亀の井ホテル油屋熊八 封筒)		—	209 × 127	個人宛 初三郎画うさぎ の図
257	2350 -65	(水野旅館 封筒)		—	215 × 130	個人宛 初三郎画月に桜 花散る水面の図
258	2350 -62	(昭和4年新春 挨拶状)		昭和4年新春 (1929)	154 × 542	裏面に初三郎画 蘇江新画室図、 巳年戯画 →画像
259	2350 -77	(鳥瞰図作成につき挨拶 状)	吉田初三郎鳥瞰図画室 観光社 代表者阿瀬庄太郎 京都市東山 区祇園南鳥居前	昭和34年新 春 (1959)	185 × 257	→画像
260	2350 -111	(吉田初三郎 肖像写真)			88 × 50	裏面「よしだ初 三郎」署名 →画像
261	2350 -112	(吉田初三郎 肖像写真)			113 × 77	→画像



258 (昭和4年新春 挨拶状) より 巳年戯画と蘇江画室図



259 (鳥瞰図作成につき挨拶状)



260 (吉田初三郎 肖像写真) (表・裏)



261 (吉田初三郎 肖像写真)

4 吉田初三郎と大塚コレクション

■吉田初三郎と二人の恩人—関係資料の調査から

当館における吉田初三郎（以後、初三郎）作品の収集は、市域を走る近鉄京都線の前身奈良電車のパンフレットを平成5・1993年に購入したことに始まる。その後、大塚隆氏の協力により、同19・2007年度特別展「パノラマ地図と鉄道旅行」、同26・2014年度特別展「日本パノラマ大図鑑」と各図録にて関係資料の調査・研究成果を公開してきた。

初三郎が全挿画を担当した鉄道省刊『鉄道旅行案内』（大正10・1921年）は、発売後1年半で40版を重ねるベストセラーとなったことで知られる。これまで、初三郎が語ってきたその事実にもみ焦点があたりがちであったが、同省による同名の案内書は初三郎作品のみにとどまらない。鉄道省（前身の鉄道院等を含む）は、明治42・1909年以降『鉄道院沿道遊覧地案内』『鉄道旅行案内』等を刊行しており、初三郎の『鉄道旅行案内』が大正15年版で終了した後も、引き続き『鉄道旅行案内』『日本案内記』等を刊行している。「パノラマ地図と鉄道旅行」展では、明治から昭和戦中期にいたる鉄道省関係のガイドブックを通覧した上で、初三郎の『鉄道旅行案内』を位置づけた。「日本パノラマ大図鑑」展では、初三郎が鳥瞰図の制作に邁進するきっかけとなった、大正3・1914年皇太子（後の昭和天皇）の石清水八幡宮訪問が3月27日の出来事であり、午後には宇治に足を伸ばしたことを明らかにした。

初三郎が、皇太子の嘉賞以後、斯界の第一人者となっていく経緯と関係した人物については、自著「如何にして初三郎式鳥瞰図は生まれたか？」（本報告書63頁）にくわしい。なかでも特別な存在が鹿子木孟郎と昭和天皇であった。

印刷、配布された鳥瞰図作品の多くに、初三郎がみずから記した「絵に添へて一筆」との一文が掲載され、描いた名所の紹介のあと、それぞれの地域において制作を依頼、あるいは支援を寄せた人びとに対する謝辞が続く。そして、やや唐突の感があるが、必ずと言ってよいほど師である鹿子木孟郎に対する謝辞が付される。昭和5・1930年までの「一筆」をまとめた『絵に添へて一筆集』（No.221）では、見返しに「謹みて本書を恩師鹿子木孟郎先生に捧ぐ」と大書している。

その理由は、鹿子木孟郎がまさに初三郎に鳥瞰図など商業美術への道を奨めた恩人であったため。ただ、当初「京阪電車御案内」の制作にかかったころは、師に促され「純正芸術」から「応用芸術」の世界に歩み始めたばかりで、「単に描いたというだけのことで、自分としては何等の感興も持てなかった」という（前掲「如何にして・・・・」以下同じ）。ところが、翌年石清水八幡宮に向かう京阪電車車内で「京阪電車御案内」を手にとった皇太子の「これは奇麗で解り易い」との言葉に感激し、「図絵報国の決意を、此時深く心中に樹立した」。後年の成功が、恩師・鹿子木に対する感謝の気持ちを強くしたことは想像に難くない。一方、自分はいくまでも洋画壇の重鎮・鹿子木の弟子、と強調することで画壇の末端に連なることをアピールしたかったの

ではないか。鳥瞰図の第一人者としての成功後も、「純正美術」への思いは捨てきれなかったことの反映ともとれよう。

一方の鹿子木は、後年みずからが主宰した画塾の塾報（『紉の森』第1年第3号、昭和6年6月）に「吉田初三郎君に就いて」の一文を寄せた。「赤貧洗うが如く加うるに身体健康ならず尚且つ母と妻あり其の窮状察するに余りありき」との状況にあった初三郎が師のもとを訪れ、「洋画の学び難きを嘆じ氣息奄々」であったため、「新案の巴里市街図を示して之を我が国に応用」するよう奨めたという（大塚隆「初三郎絵図のルーツは電鉄沿線図」）。

「鹿子木孟郎調査委員会」（河北倫明代表）により実施された遺族宅の調査では、『紉の森』は「第2年第6号（昭和7年8月）、第3年第8号（昭和8年4月）、第4年第9号（昭和11年3月）」の3冊が確認された（『没後50年 鹿子木孟郎展』ほか）。「吉田初三郎君に就いて」の掲載号を含めると、少なくとも現在4冊の伝来が確認されたわけである。また、初三郎は「日露戦争」従軍後、「郷里の京都に起臥して鹿子木先生の門に入り」と記し、鹿子木孟郎『回顧五十年』付録の塾生名簿のうち「関西美術院」の項に「吉田初三郎」の名がある。これらから、年譜等では初三郎が「関西美術院で学んだ」とするが、「関西美術院入学者名簿」（『浅井忠と関西美術院展』所収）に彼の名は見当たらない。将来、吉田初三郎と鹿子木孟郎の師弟、それぞれについての調査・研究の進展により、こうした空隙が埋められていくことを期待したい。

もうひとりの恩人である皇太子による「嘉賞」のエピソードについて初三郎は、「大正三年其の夏」「九州耶馬溪」において「京阪電車太田氏」から知らせを受けたと記し、「図絵報国の決意を、此時深く心中に樹立した」とドラマチックに語る。初三郎はこの時の知らせを「飛檄」「来信」「飛信」と三様に表記。そのうち「飛檄」と「飛信」には急信の意が含まれ、特に「飛信」には「①急ぎの書信」のほか「②一八七四年（明治七）に行われた郵便制度の一。非常至急の書信を、継立を以て極力速やかに递送したもの」（『広辞苑』第四版）の意があることから、この件を紹介する諸書において「電報」「速達」あるいは「特別扱い速達」と表現されてきた。

さきに触れたように、皇太子の石清水八幡宮訪問は3月27日で、「大正三年其の夏」の知らせまではかなり時間が経過していることは明らかである。しかも、「飛信」制度は、電報の普及とともに利用が減少し、制度そのものが大正6・1917年に廃止される直前のことであった。あるいは、太田氏の側に他の急用が生じたのかもしれない。だが、皇太子の件については少なくとも2か月程度は経過しており、急ぐ必要はなかったはずだ。初三郎が鳥瞰図制作に邁進する契機となったというエピソードの重要性が、そして初三郎自身の筆致が、こうした解釈を導いてしまった可能性がある。

■大塚コレクションにおける初三郎関係資料

当館所蔵の吉田初三郎関係資料の多くが、京都関係絵図のコレクター・大塚隆氏（1926～2017）の寄贈によるものであることは、本報告書24「1 吉田初三郎関係

資料について」のなかで述べたところである。ただこれらは、かつて大塚氏が所蔵されていた初三郎関係資料のごく一部にすぎない。

京都に本拠を置くコレクターの同好会、「神九図^{かみくず}之会」が発行した同会25周年記念誌『蒐宝録』には、全会員の紹介欄が設けられている。大塚氏の「蒐集品」の項に「京古地図・現代都市図パンフ・初三郎絵図」、「他の趣味」の項には「京都郷土資料」とあり、初三郎関係資料が氏のコレクションの柱の一つであったことがうかがえる。その出会いは、子ども時代にまでさかのぼるという。

私は地理、歴史が好きで、小学三年ごろ雑誌「少年倶楽部」付録、島田啓三作の「日本満州見学地理」をあかずながめていた。それは十ページに分けて日本各地の物産、交通などがイラストマンガ風に描かれたものであった。これがこの種のものを手にした最初である。ほぼ同時期、昭和十年に初めて初三郎の「洛東洛西洛南洛北・京名所交通図絵」を手に入れた。それは京都市教育会が御大典記念として配ったもので、小学生向けに作られ、伏見桃山を手前に、遠景は伊吹山を配した鳥瞰図だった。子供時分の行動範囲は狭く、縦十八センチ、長さ七十五センチほどの八枚折りの絵の中に、かつて父母につれていかれた諸所のことを思い出し、未知の土地を想像するなど見果てぬ夢を描いたものであった。

(中略)

子供のころは数えるほどしかなかった初三郎の図絵も終戦後から本格的に集め出し、古書即売会や趣味の会員、友人の情報で入手、友人間では「初三郎といえば大塚」といわれるようになった。現在点数は確認していないが、折り本の図絵のほか、絹本、紙本の大小の原画、絵はがきから初三郎の写真、刊行目録、頒布目録などが雑然と手元にある。

大塚隆「『大正の広重』吉田初三郎」(『日本経済新聞』昭和52・1977年10月14日)既に「初三郎といえば」と仲間内から評されるほど、コレクションが充実していたようだ。この20年後には、以下の記述が見える。

多年集めていた初三郎パンフは、関西の某市立博物館へ絹本紙本の原図をはじめ資料とも一括して、東京の業者を経て納入し、手許には京都周辺のみを残しました。

大塚隆「わが収集品を廿一世紀へ」(『瓦版 神九図』平成9・1997年9月号)この「某市」が、大阪府堺市であることは、『大正・昭和の鳥瞰図絵師 吉田初三郎のパノラマ地図』奥付の注記「*年譜に挿入の初三郎関係写真については、大塚隆氏の提供を受けました。(同氏が堺市博物館に譲渡したものを含みます)」や、藤本一美「吉田初三郎の鳥瞰図原画」で紹介された資料のうち2点に「大塚隆氏旧蔵。現堺市博物館所蔵。」とあることから容易に推察される。この時手許に残された資料が、その後当館に寄贈されることとなった。

同氏からの寄贈資料には、同タイトル同版と見られる資料が複数存在するが(No.49 琵琶湖遊覧御案内ほか、報告書24「吉田初三郎関係資料目録1 原画・鳥瞰図」参照)、それは氏の資料収集方法の反映でもあった。コレクターとして古書市場で名がとおっ

てくると、業者からの持ち込みが多くなる。氏は、これらを取捨選択することなくすべて受け入れ、言い値通りで引き取ったという。そのため、京都関係、初三郎関係なら大塚へとコレクションが更に充実していった。一方で、こうした方法をとった場合、資料の重複は避けられない。京都市歴史資料館が大塚氏から受贈した資料には、「花洛一覽図」が4点含まれるという（『叢書京都の史料16 京都摺物集成』）。当館にも1点受贈しており、同図は一時期少なくとも5点が大塚氏のもとにあったわけである。

■複数の大塚コレクション

世に複数の大塚コレクションが存在する。これは、京都関係の絵図・地図コレクターである大塚隆氏が、諸機関に寄贈したそれぞれの資料群がそう呼ばれたため。なかでも代表的なものは、京都大学附属図書館と京都市歴史資料館の資料群であろう。

京都大学へは平成12・2000年に「京都古地図コレクション」470点が寄贈され、翌13年3月刊行の『京都大学所蔵古地図目録』に明治45・1912年以前の303点の目録が「大塚京都図コレクション」として収められた。同年6月には、同コレクションをひとつの柱とした京都大学総合博物館開館記念協賛企画展「近世の京都図と世界図」が開催されている。

京都市へは、平成13・2001年と同27・2015年の2回にわたり寄贈され、前者約1000点は①京都図、②内裏図、③災害図、④明治期博覧会関係、⑤川絵図、⑥武鑑等名鑑類、後者約500点は幕末期京都の摺物・錦絵類、祇園会関係資料が中心である。内容は非常に幅広く、大塚氏の「蒐集の対象は地図だけにとどまらず、江戸時代から昭和までの京都に関するあらゆる情報媒体へと広がり、いずれもその時代の京都の様相を知り得る大変貴重な史料になっている」という（『京都摺物集成』解説）。資料は企画展で随時公開されるとともに、『叢書京都の史料7 京都武鑑 上』『同8 京都武鑑 下』『同14 内裏図集成』の中心資料として活用された。また『同16 京都摺物集成』は、すべて同氏寄贈資料で構成されている。

これら2館に先立ち平成11・1999年と翌年には、大塚氏の父親の出身地である五個荘町歴史民俗資料館（当時）に滋賀県関係の古絵図、地形図等80点を寄贈されている（『毎日新聞』滋賀県版、平成12年11月19日号）。

大塚氏は、父親が創業した和装関係の間屋を営むかたわら、上記をはじめ多様な資料を収集されてきた。それらにより、みずからも1970年代から80年代にかけて調査・研究の成果を精力的に報告されている（大塚隆氏著作一覽参照）。それは、氏の40歳代なかばから50歳代にかけてのことであった。

その後、「高齢化し、散逸する事なく生前に然るべき公共機関を選び、保管して貰うべく、此の程順次実行をはじめました。」（前掲「わが収集品を廿一世紀へ」と記されたのは、氏が70歳を迎えた平成9・1997年のことである。すでに当館（初三郎鳥瞰図、観光パンフレット、絵はがき等49点）、京都府京都文化博物館（府内地図、初三郎鳥瞰図等47点）、そして吹田市立博物館にも展覧会への出展を機に若干の資料を寄

贈した旨を記したあと、前掲の某市への初三郎関係資料一括納入の件をしるす。その後、京都大学や京都市歴史資料館への寄贈がおこなわれた。

当館へは、その後も宇治関係はもとより、江戸時代から近代にいたる多種多様な資料の提供を受け、特別展で公開し図録に掲載してきた。主なものは下記のとおり（初三郎関係を除く）。

平成16・2004年度「幕末・明治京都名所案内 旅のみやげは社寺境内図」

21・2009年度「弥次さん喜多さん京をゆく」

28・2016年度「JR奈良線120年 進め!!奈良鉄道」

29・2017年度「写真展 よみがえる明治の日本」

30・2018年度「幕末明治・京都遊覧 銅版画の世界」

また、『収蔵資料調査報告書10 幕末の銅版画』、『同17 京都社寺境内図』においても、関係資料の目録を付して報告したところである。

■多彩な資料群

『京都摺物集成』解説では、大塚氏について「もはや古地図研究家の枠を超えて、近世から近代までの京都研究家というべき」と評される。まさに当を得たものだが、実は同氏の収集対象はこれにとどまらない。

大塚隆氏は、地元の中立尋常小学校を昭和14・1939年に卒業後、立命館商業学校を経て、昭和18年立命館専門学校理学科第一部化学科に入学。昭和22年同校を卒業後、立命館大学法学部に進んだ。理系の学生であったため、徴兵が猶予されている間に終戦を迎える。兵役についた同級生らへの思い、「忘却されゆく庶民の痛み、当時を生き抜いたあかしに」（前掲『わが収集品を・・・』以下同）戦時関係資料を収集し、終戦から30年にあたる昭和50・1975年8月14日から19日にかけて、神九図之会5周年記念事業として他の会員諸氏とともに大丸京都店地下ショーウインドウにて「終戦の頃、あの日あのとき生活展」を実施された。

これら「戦中庶民資料」は、昭和56・1981年にはじまった「平和のための京都の戦争展」にも毎年貸出していたが、運営が変わりそのまま一括して立命館大学平和ミュージアムに「移管」され「寄託」された。同ミュージアム『資料目録第1集』には、同氏からの寄託資料として「防空用防毒面」「国民服用儀礼章」「家庭用野菜購入票」「主婦之友」「布製ランドセル」（以上口絵カラー写真掲載）など294点が、『同第2集』には同氏自身の「教練検定合格証明書」など寄贈資料154点が掲げられている。なかでも後者は、「軍国少年として教育をうけ、戦後に及ぶ全就学期は、一個人のものとはいえ当時の文教政策が反映していて資料になる」との思いからの寄贈という。

この時点で「まだ未公開が数倍ほど未整理」と記されている。その一部と見られる資料を当館で受納しており、『収蔵資料調査報告書8 戦争関係資料』にて紹介したところである（収蔵資料番号1-844「大塚隆氏収集戦争関係資料」103点、1-845「大塚隆氏収集戦中・戦後の図書・雑誌」418点、1-846「大塚隆氏収集戦争関係図書」436

点)。

■大塚コレクションと佐藤コレクション

佐藤コレクションとは、愛知県刈谷市の文化財保護委員を務めた佐藤峻吉氏が収集したコレクションの総称である。刈谷市中央図書館に瓦版や歌舞伎番付を中心とした約1000点の「佐藤コレクション」が所蔵されるほか、名古屋市博物館、京都国立博物館にも収集資料の一部が寄贈されている。

佐藤氏は、生前京都に在住し、印刷会社や京都市役所に勤務されていた時期のあることから、大塚氏との交流が持たれたようだ。前述の「花洛一覧図」の1点には佐藤氏旧蔵品を示す「昏魚庵蔵書」の朱印が押されている。同印は、国文学研究資料館「蔵書印データベース」にも登録されている。当館が大塚隆氏から受贈した「社寺境内図」にも、「慈舟山瑞泉寺略縁起」(652-83)、「天智天皇叡願感得御本尊略縁起」(同84)、「醍醐御殿御本坊御庭拝見之次第」(同132)、「城州鞍馬寺兵法場名石」(同223)、「御室山内四国巡拝所細見図」(同302)の6点に同様の印影が見える。

前項で触れた「大塚隆氏収集戦争関係資料」には、「家庭用塩購入票」や「家庭用砂糖・マッチ購入票」「衣料切符」「家庭用米穀配給通帳」など、配給制度の中で暮らしを営む人びとの、まさに必要不可欠であった資料が多数含まれている。その多くは「佐藤峻吉」名義である。神九図之会の活動でも見られたことだが、コレクター仲間の交流が資料の譲受に発展し、お互いのコレクションの形成・充実に寄与していたことがうかがえる事例であろう。

参考文献：○鹿子木孟郎関係

『回顧五十年』鹿子木孟郎 私家版 1924 (本書の調査に際し倉敷市中央図書館渡邊隆男氏の協力を得た)

『没後50年 鹿子木孟郎展』三重県立美術館ほか 1990

『鹿子木孟郎展一師ローランスとの出会い』府中市美術館 2001

『鹿子木孟郎史料集』鹿子木孟郎調査委員会 学芸書院 2016 (本書には『回顧五十年』の本文「自叙略伝回顧五十年」が復刻されているが、「芳名録」および「附録」の塾生名簿は省略。)

○大塚コレクション関係

『平和のための京都の戦争展-14年間(14回)の写真記録-』京都平和資料事業センター 1994

『蒐宝録』(神九図之会創立二十五周年記念)神九図之会 1995

『資料目録 第1集』立命館大学国際平和ミュージアム 1998

「史料紹介 近世京都の年中行事一覧「都年中参詣記」」小嶋正亮 『宇治市歴史資料館年報 平成10年度・1998』宇治市歴史資料館 2000

「附属図書館に「京都古地図コレクション」の寄贈」附属図書館 『京大広報』554 2001.2

「大塚京都図コレクション」『京都大学所蔵古地図目録』金田章裕 京都大学大学院文学研究科 2001

『近世の京都図と世界図-大塚京都図コレクションと宮崎市定氏旧蔵地図-』京都大学附属図書館 2001

『資料目録 第2集』立命館大学国際平和ミュージアム 2004

「史料紹介 空から見た江戸時代の宇治-宇治名所図」小嶋正亮 『宇治市歴史資料

館年報 平成16年度・2004』宇治市歴史資料館 2006

「京都の火災図 京都市歴史資料館蔵大塚コレクションについて」伊東宗裕 『京都歴史災害研究』9 2008

『昭和20年の中学生』立命館大学国際平和ミュージアム 2008

「資料：「昭和20年の中学生展」兼清順子 『立命館平和研究－立命館大学国際平和ミュージアム紀要－』10 立命館大学国際平和ミュージアム 2009

『京都古地図めぐり』伊東宗裕 京都創文社 2011

「英文京都案内『CELEBRATED PLACES IN KIYOTO & THE SURROUNDING COUNTRIES FOR THE FOREIGN VISITORS』について」小嶋正亮 『宇治市歴史資料館年報 平成29年度・2017』宇治市歴史資料館 2019

『叢書京都の史料16 京都摺物集成 江戸時代の京のにぎわい』京都市歴史資料館 2020

○佐藤コレクション関係

「歌舞伎番付の数種について」横山正 『近世文芸』23 1973

『佐藤コレクション目録』刈谷市立図書館 1980

【大塚隆氏著述一覧】

国会図書館所蔵資料のデータ、出版社「之潮（コレジオ）」ホームページ所載『古地図研究』総目次等により作成した。網羅的なものではないため、「目録」とせず「一覧」とした。参考資料として掲出する。

○図書（単著）

『京都図総目録』（日本書誌学大系18）大塚隆 青裳堂書店 1981

『慶長昭和京都地図集成 1611(慶長16)年－1940(昭和15)年』大塚隆 柏書房 1994

○図書（共著）

『京の火事物語』（緑紅叢書51）田中泰彦、大塚隆 京を語る会 1972

『日本の古地図 4 京都』講談社、1976 矢守一彦、大塚隆

『日本の古地図 10 京都幕末維新』講談社 1977 矢守一彦 大塚隆

『太陽コレクション・地図 江戸・明治・現代2 京都・大坂・山陽道』平凡社 1977 矢守一彦 大塚隆

『新撰京都叢書』新撰京都叢書刊行会 編 臨川書店 1984～89 編集委員：野間光辰、森谷尅久、村井康彦、大塚隆

*大塚氏は、同叢書の第6巻、第11巻上・下の校訂・解題を担当されたほか、他巻の底本にも所蔵資料を提供されている。

○その他

「西陣賃織業の労働問題」『立命評論』第1号 1950.5

「京都社寺境内版画集」『古地図研究』第34号 1972.12

「京都社寺境内版画集（二）」『古地図研究』第35号 1973.1

「天明七年「早見京絵図」について」『古地図研究』第53号 1974.7

「明治初期の京都地図」『郷土資料』19号 京を語る会 1974

「53号カットによせて」『古地図研究』第56号 1974.10

*同カットは「大日本名所図絵 66号 京都名所 東山之上」

「京都遊郭の一枚摺」『古地図研究』第57号 1974.11

「明治の京都地図－洛中洛外と御土居－」『古地図研究』第60号 1975.2

「京都古版地図目録と解題編」『古地図研究』第61号 1975.3

「明治初期の京都地図概観」『古地図研究』第63号 1975.5

「京都初期の焼場について」『古地図研究』第66号 1975.8

「内裏公家町絵図の初期の刊行について」『古地図研究』第68号 1975.10

「京町絵図の初期刊行の考察」『古地図研究』第71号 1976.1

「松浦武四郎自筆の嘉永7年・蝦夷権太図」「長沙馬王堆出土の二千年前の地図」『古地図研究』第72号 1976.2

- 「畿内の古版川絵図」『古地図研究』第76号 1976.6
- 「幕末京都の施行と瓦版」『歴史読本』21巻13号(通巻261号) 新人物往来社 1976.11
- 「京都叢書にみる古地図について」『新修京都叢書別冊 配本のしおり第九号』 臨川書店 1976
- 「カット解説 千里ニュータウンの鳥瞰図」『古地図研究』第86号 1977.4
- 「近世伏見の地図史概観(一)」『古地図研究』第87号 1977.5
- 「近世伏見の地図史概観(二)」『古地図研究』第88号 1977.6
- 「大正の広重 吉田初三郎」『日本経済新聞』昭和52・1977年10月14日号
- 「淀川の船旅と川絵図」『日本の古地図 11 浪華大坂』講談社 1977
- 「近世黎明期の京絵図に就いて」『古地図研究』百号記念論文集 『古地図研究』附古地図集 1978.12
- 「瓦版にみる幕末京都の世相 庶民の唯一の情報源だった一枚刷に激動期の世相をみる」『歴史読本』24巻5号(通巻300)号 新人物往来社 1979.4
- 「京都の歓楽街細見図に寄せて」『古地図研究』第118号 1979.12
- 「昭和54年度の京都古地図界の回顧」『古地図研究』第122号 1980.4
- 「古地図短信 幸安の京都図の下書」『古地図研究』第123号 1980.5
- 「古地図短信 百年ぶりに元禄期の洛中実測図が公開さる」『古地図研究』第126号 1980.8
- 「古地図短信 古地図のメッカ 京都の催し」『古地図研究』第129号 1980.11
- 「古地図短信 元禄期の洛中実測図についての再報」『古地図研究』第130号 1980.12
- 「古地図短信 「京都市遺跡地図」の刊行」『古地図研究』第132号 1981.2
- 「本邦刊図の濫觴の地は京都寺町か」『古地図研究』第141号 1981.11
- 「初三郎絵図成立の時代背景」『古地図研究』第150号 1982.8
- 「伏見町絵図」『日本城下町繪圖集 近畿篇』児玉幸多 監修, 矢守一彦 編 昭和礼文社、1982
- 「地図と私」『地図ニュース』121号 日本地図センター 編 日本地図センター 1982.10
- 「初三郎絵図成立の時代背景」『古地図研究』150号 昭和57年8月 1982
- 「京都の町地図—明治・大正・昭和—」『大阪・京都・神戸・奈良の都市地図について—「日本近代都市変遷地図集成」解題—』 柏書房 1988
- 「京都の観光地図の今昔」『地図ニュース』205号 日本地図センター 編 日本地図センター 1989.10
- 「京都近代化を地図でみる」『古地図研究』第282号 1993.8
- 「京都の地図の系譜」『地図情報』14巻4号(通巻53号) 地図情報センター編 地図情報センター 1995.03
- 「わが収集品を廿一世紀へ」『瓦版 神九図』 神九図之会 1997.9
- 「地図が語る京の歴史」『旅』74巻1号(通巻876号)付録「京都市街地図」解説 新潮社 2000.1
- 「初三郎絵図のルーツは電鉄沿線図」『古地図研究』第307号 2000.3
- 「昭和3年の御大札と初三郎鳥瞰図」『旅』77巻1号(通巻912号) 付録「京名所交通図絵」解説 新潮社 2003.01

<編集後記>

大塚コレクションを代表するものと言えば、やはり現在京都大学附属図書館と京都市歴史資料館が所蔵する京都関係の絵図群であろう。だが、同氏の関心はそれにとどまらず、将来的に歴史資料になると考えられる、身の回りのあらゆるものを残そうと考え実践された。その総体が、大塚コレクションであるとしてよいだろう。公刊された情報をもとに、可能なかぎり全貌に迫ろうとしたのが本稿である(天上の同氏には「その程度のものではない」とお叱りを受けるであろう)。

これだけのコレクションゆえに、一括の譲渡を望む研究機関が出てくるのは当然のなりゆきであった。京都大学からの申し出も、当初はそうした趣旨であったという。ただ、大塚氏は、資料が公開・利用されることを何よりも望んでおられた。そうした思いから、みずからそれぞれの資料群ごとにふさわしい寄贈先を検討し実行に移されていたことは、本文で記したとおりである。

宇治市歴史資料館では、コレクションの一端を所蔵する機関として、大塚隆氏の遺志に沿うべく、今後も資料の調査・研究を進め公開に努める所存である。

*本書の執筆、目録作成は、小嶋正亮が担当した。

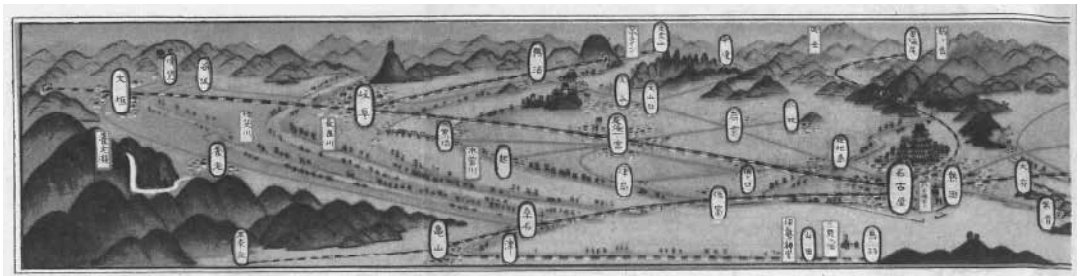


部の 端發をしと今月號らか毎本欄上部に連載さるす

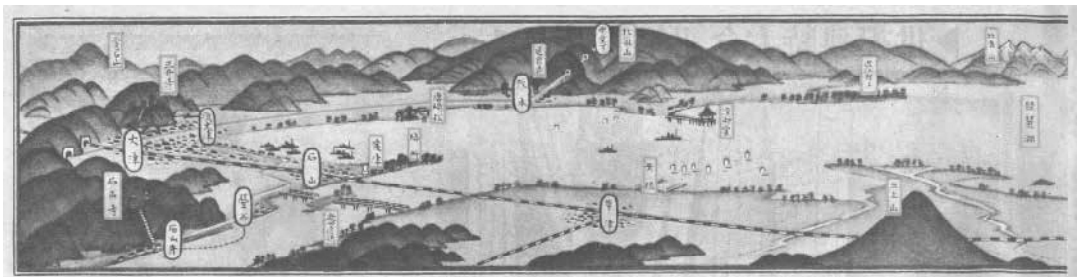
『キング』昭和4・1929年1月号



『キング』昭和4・1929年2月号



『キング』昭和4・1929年3月号

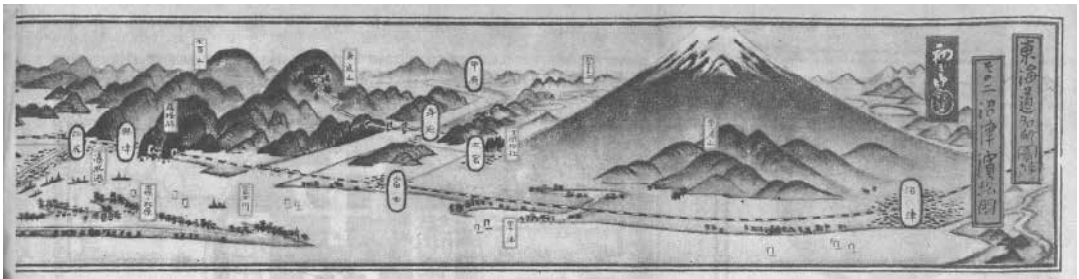


『キング』昭和4・1929年4月号



「東海道名所図繪」は「巻繪所名國全本日」作傑の心苦伯畫郎三初田吉

「東海道名所図繪 その一 東京・沼津間」



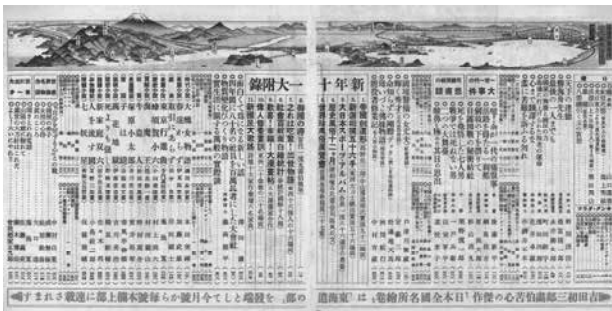
「東海道名所図繪 その二 沼津浜松間」



「東海道名所図繪 その三 浜松大垣間」



「東海道名所図繪 その四 大垣大津間」



『キング』昭和4年1月号 目次 (全4頁のうち中央2頁)

【参考】『キング』連載「日本全国名所絵巻」

参考資料として、次頁に『吉田初三郎先生作日本全国名所
図絵 蒐集目録』²⁶⁵ 日本全国名所図絵」を掲載する。「キ
ング一月号より連載」とも記すように、当時百万部以上の
発行部数を誇った大衆娯楽誌『キング』の目次見開き上部
に掲載された。それまで、毎号季節ごとのイラストがあし
らわれていた場所である(前年一二月号は大売出・羽子板
市・クリスマス・餅つきなど)。一月号では、上段に「東海
道名所図絵 その一 東京・沼津間」を掲げ、中央に目次本

文、そして最下段には「吉田
初三郎画伯苦心の傑作「日本
全国名所絵巻」は「東海道の
部」を発端として今月号から
毎号本欄上部に連載されます」
と高らかにうたう。

しかしながら、東海道も完
結しないまま、連載は4月号
で打ち切られた。5月号には
ふたたび端午の節句にちなん
だカブトなどのイラストに戻
り、誌面には連載終了の告知
も見当たらない。

△未蒐集品目録▽

- ▲京浜電車沿線案内
- ▲北海道大鳥瞰図
- ▲北海道全道鳥瞰図
- ▲北海道力リカチ国境鳥瞰図
- ▲樺太交通鳥瞰図
- ▲箱根電車沿線案内
- ▲箱根芦の湯温泉案内
- ▲箱根温泉全湯案内
- ▲湯ヶ原温泉案内
- ▲修善寺温泉案内
- ▲伊豆温泉案内
- ▲伊豆長岡温泉案内
- ▲下加茂温泉案内
- ▲伊東温泉案内
- ▲山城国宇治
- ▲相模国
- ▲奈良名所図絵
- ▲讃岐国琴平案内
- ▲日光金谷ホテル案内
- ▲洛東名所図絵

▲鶴見総持寺

▲高輪泉岳寺

▲東京上野公園

▲小田原二宮神社

▲清水寺名所図絵

▲湖南汽船航路案内

▲久能山を
中心とせる 三保松原・清見寺図絵

▲宇都宮
大谷観音 付近名所図絵

▲浜名湖弁天島名所図絵

▽追加△

262(つ)

(此の余白へは、今後新発見の珍品、本目録の異動乃至順次刊行さるる新作品等を御記入下さい)

浅野採掘事業要覧(東京付近) 一 大正十三年一

△昭和四年▽

- 262 肥前 祐徳稻荷神社図絵
- 263 鹿島 三国芦原電鉄沿線案内
- 264 技芸倶楽部一月号
- 265 日本全国名所図絵

(表紙)

(キング一月号より連載)

―昭和四年一月現在―

△ポスター▽

- 1 宮津鉄道開通 (大正十一年)
- 2 天下の楽土別府温泉 (大正十二年)
- 3 萩鉄道開通 (同)
- 4 南知多遊覧 (同)
- 5 耶馬溪 (同)
- 6 北丹鉄道―二種― (同)
- 7 男山ケーブル開通 (大正十三年)
- 8 琵琶湖遊覧 (同)
- 9 叡山鉄道開通 (同)
- 10 玖珠の涼味 (大正十四年)
- 11 若狭高浜 (同)
- 12 南武鉄道開通 (大正十五年)
- 13 小田原急行開通 (同)

- 14 伊勢電鉄 (同)

- 15 山梨電気博覧会 (昭和二年)

- 16 伊勢鼓ヶ浦海水浴 (同)

- 17 唐津名所歴史と伝説 (昭和三年)

- 18 別府地獄めぐり (同)

- 19 耶馬溪周遊 (同)

- 20 若狭高浜内国勸業博覧会 (同)

- 21 南知多情緒 (同)

- 22 日本ラインは太田から (同)

- 23 日本ライン松茸狩り (同)

- 24 叡山架空索道 (同)

- 25 鞍馬電鉄開通 (同)

- 26 三国芦原電鉄開通 (昭和四年)

- 27 京都付近交通図 (同)

△絵はかき▽

- ▲北海道樺太真岡港全景

- ▲日光電鉄沿線開通記念

- ▲峯山線開通記念

- ▲東京下関間 旅客用備付品
▲特急列車

- ▲其他、年賀用、挨拶用絵はかき数種

- 220 小牧山戦蹟図絵 (第二回作品)
- 221 唐津名所歴史と伝説 (第二回作品)
- 222 桜の日本歴史絵巻
- 223 赤穂鉄道沿線図絵
- 224 大連
- 225 旅順
- 226 千山
- 227 大和尚山・金州
- 228 星ヶ浦
- 229 叡山電鉄案内 (小型) (第二回作品)
- 230 涼風みなぎる四明ヶ岳 (絵はかき)
- 231 土佐電気沿線案内
- 232 京名所・平野屋いもぼう案内
- 233 日本ライン御案内 (第三回作品)
- 234 同 (小型)
- 235 京都都ホテル御案内 (英文)
- 236 同 (和文)
- 237 京都名所 洛東遊覧交通図絵 (額 面用)
- 238 京都名所 洛西遊覧交通図絵 (函入 対扇面)
- 239 鞍馬電鉄沿線案内
- 240 叡山架空索道案内 (絵はかき)
- 241 京都 (大札記念博用)
- 242 KYOTO (同英文)
- 243 洛東洛西 京名所交通図絵 (四部作)
- 244 洛南洛北 京都名所大鳥瞰図 (昭和御大典記念)
- 245 高知県鳥瞰図
- 246 高知市得月楼御案内
- 247 奈良電気沿線案内
- 248 神戸有馬電鉄沿線案内
- 249 岡崎市を三鉄・愛電両社沿線案内 (第三回作品)
- 250 名古屋鉄道沿線案内
- 251 日本第一 製塩地 中関町案内
- 252 小倉鉄道沿線案内
- 253 京名所・大丸御案内
- 254 宮島広島案内
- 255 山紫 水明 日田盆地図絵
- 256 明治節記念様図絵
- 257 紫宸殿御即位の御盛儀
- 258 大饗五節の舞
- 259 東京より一二泊の旅 (英文)
- 260 門司川卯旅館 (はかき二枚一組)
- 261 愛国美談感涙集 (装幀)

- 199 198 197 196 195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181 180 179
- 唐津名所案内 (しをり付)
 唐津案内 (小型)
 唐津名所歴史と伝説 (第一回作品)
 博多名所図絵
 福岡市並近郊図絵 (小型)
 同
 小田原急行電鉄沿線案内 (名刺型)
 同
 伊勢電鉄沿線案内 (第二回作品)
 醍醐山名所図絵 (第二版)
 大軌電車・沿線案内 (第二回作品)
 日本ライン彩雲閣御案内 (第二回作品)
 名古屋鉄道沿線案内 (表紙高浜港)
 松山道後名所図絵 (同 鶴下松下城)
 松山道後名所図絵
 石崎汽船航路御案内
 大三島と道後図絵
 愛知県鳥瞰図
 茶の静岡県
 日本八景雲仙案内 (第二回作品)
 正邪産業島鳥瞰図
 二道

- 219 218 217 216 215 214 213 212 211 210 209 208 207 206 205 204 203 202 201 200
- 京都都踊写真帖 (装幀)
 日本鳥瞰近畿東海大図絵
 日本鳥瞰中国四国大図絵
 日本鳥瞰九州大図絵
 △昭和三年▽
 旅と名所 (装幀)
 歴代御陵巡拝図絵
 京都都踊写真帖 (装幀)
 京都加茂川踊写真帖 (装幀)
 日支航路案内(雲仙岳) (第四版)
 東海大鳥瞰図 | 名古屋から日帰りの旅 | (第二回作品)
 東海名所蒲郡常磐館案内
 人吉温泉球磨川下り案内
 京王電車沿線案内
 清水静岡名所図絵
 養老電鉄沿線案内
 富士身延鉄道沿線案内
 津市小観
 別府市中外産業博覧会案内
 水浜電車沿線案内
 同 (表紙別種)

- 158157 箱根名所図絵 (第五回作品)
 和歌浦名所図絵 (第一回作品)
 南紀白浜名所図絵
 塩原電車沿線案内
 南伊豆遊覧案内
 関東廿四輩聖蹟案内
 瀬戸内海航路図絵 (第二版)
 同 英文 (第二版)
 伏見稻荷全境内案内図 (第一回作品)
 大軌電車沿線案内 外一種 (第一回作品)
 附 吉野電車案内 (第三回作品)
 耶馬溪御案内
 南知多遊覧交通図絵
 長門峡鳥瞰図
 湊鉄道沿線案内
 東武鉄道沿線案内
 萩名所誌
 朝熊山登山案内 (第二回作品)
 日支航路案内 (温泉岳) (第三版)
 △大正十五年▽
 目黒蒲田 電鉄沿線案内
 東京横浜 電鉄沿線案内
 熱海温泉・桃山案内
- 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147146 145 144 143 142 141 140 139
- 178 琵琶湖名所鳥瞰図 (第一回作品)
 南紀熊野名所交通鳥瞰図
 大阪電気博覧会 を中心とせる 日本全国名所交通鳥瞰図
 近畿 を中心 とせる 名勝交通鳥瞰図
 豆相温泉案内誌 (挿絵・装幀)
 伊香保榛名名所図絵
 奇勝耶馬全溪谷案内 (第四回作品)
 長州荒瀧山図絵
 叡山電鉄沿線案内 (しをり付)
 同 (小型)
 別府温泉遊覧案内 (市役所発行)
 別府遊覧のしをり (亀の井ホテル発行)
 日名子旅館御案内
 琵琶湖遊覧御案内 (第二版しをり付)
 和歌浦遊覧案内 (第二回作品)
 新和歌浦遊覧案内
 比叡山頂一目八方鳥瞰図
 日光名所・小西旅館 (第三回作品)
 叡山ケールカー (玩具)
 △昭和二年▽
 南武鉄道図絵
- 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161 160 159

119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104 103 102 101 100

房総遊覧図絵
 長岡温泉御案内
 熱海温泉御案内
 萩名所図絵
 湯の平温泉案内
 新別府温泉案内
 延岡名所図絵
 愛宕山名所図絵
 御室仁和寺
 嵯峨大覚寺
 広隆寺を
 中心とせる 洛西名所図絵
 京都洛西名所図絵
 伊豆名所図絵
 宇和島交通鳥瞰図
 日本ライン名所図絵
 青梅鉄道沿線案内
 岡山後樂園名所図絵
 大正広重物語

(第二回作品)

(第一回作品)

(第二回作品)
 (第二回作品)

△大正十三年▽

138 137 136 135 134 133 132 131 130 129 128 127 126 125 124 123 122 121 120

東海
 名所 蒲郡常磐館案内
 北丹鉄道沿線案内
 宮津橋立名所図絵
 橋北汽船航路御案内
 由良の絶景
 舞鶴図絵
 新舞鶴図絵
 中舞鶴図絵
 高千穂名所図絵
 山陽ホテル御案内
 同 英文
 伊予鉄道沿線案内
 耶馬溪御案内
 鞍馬寺
 鷹ヶ峯光悦寺
 洛北名所図絵
 伝説の大江山
 関東大震災全地域鳥瞰図
 日本全国鉄道旅行案内

(第一回作品)

(第一回並第二回作品二種)

(第一回作品)
 (第二回作品)

(第二回装幀・挿絵)

△大正十四年▽

△大正十年▽

- 63 箱根名所図絵 (第三回作品)
64 比叡山延暦寺名所図絵 (第二回作品)
65 鎌倉江の島名所図絵 (第二版)
66 江の島鎌倉名所図絵 (第二版)
67 温泉名所図絵 (第一回作品)
68 小浜温泉名所図絵 (第一回作品)
69 法隆寺名所図絵
70 越後鉄道沿線案内
71 日本全国鉄道旅行案内 (第一回装幀挿画)
72 日光名所図絵 (第二回作品)
73 日光自動車案内 (第二版)
74 箱根名所図絵 (第四回作品)
75 鎌倉江の島名所図絵 (第三版)
76 江の島鎌倉名所図絵 (第三版)
77 那須温泉御案内
78 同 (表紙別種)
79 大雄山最乗寺名所図絵
80 日支航路案内 (雲仙岳) (第二版)

81 官幣大社富士山名所図絵 (第二版)

82 富士登山案内

83 秩父鉄道沿線案内

84 三峯山名所図絵

85 秩父長瀬遊園地図絵 | 前田虹映先生作品 |

86 史跡 金剛山名所図絵 要覧

87 浅野セメント 事業要覧 秩父探炭

88 古奈良岡温泉案内

89 常陸 礼場 笠間 稻荷

90 香取鹿島神宮案内

91 鹿島神宮案内

92 箱根 温泉 観光館案内

93 高野山名所図絵

94 同 大観

95 高野山電車沿線案内

96 同 大観

97 日本を中心とせる世界交通鳥瞰図

98 大銚子遊覧図絵

△大正十二年▽

99 小湊 房州名所図絵 誕生寺

26 別府温泉御案内
(第一回作品)
27 箱根温泉御案内
(赤小型)

△大正七年▽

28 川崎大師平間寺
29 定山溪温泉案内
30 登別温泉案内
31 穴守稻荷案内
32 成田山全景
33 古川鋳業会社 事業要覽
日光電気精銅
34 伊豆・熱海・伊豆山
湯ヶ原・箱根・伊東 温泉案内
35 熱海温泉案内
(第一回作品)

△大正八年▽

36 日光名所図絵
(第一回作品)
37 日光大観
38 日光自動車案内
(第一回作品)
39 身延山図絵
40 伊勢名所図絵
41 朝熊山名所図絵
42 朝熊岳登山案内

43 箱根名所図絵
(第二回作品)
44 江の島と鎌倉名勝
(大仏)
45 日支航路案内(雲仙岳)
(日本郵船第一回発行)
46 富士山名所図絵

△大正九年▽

47 箱根強羅園案内
48 塩原温泉名所図絵
49 同
(表紙白雲洞瀧・溪流)
50 信貴山名所図絵
(無印)
51 同
(玉蔵院・朝護孫子
千手院・成福院)
52 比叡山延暦寺名所図絵
(第一回作品)
53 比叡山大観
54 栗林公園案内
55 塩原袖の沢温泉案内
56 日光電車沿線案内
57 日光名所・小西旅館
(第一回作品)
58 醍醐山名所図絵
(第一回作品)
59 養老公園名所図絵
60 瀬戸内海航路図絵
61 同 英文
92(2) 瀬戸内海遊覧図絵
(大型)

以上全部

鉄道省発行

(二五〜三九頁)

吉田初三郎先生作
日本全国名所図絵

蒐集目録

奥田卯三郎編
観光社補訂

△大正二年▽

1 京阪電車御案内

(処女作)

2 同 大型

(第二回作品)

△大正三年▽

3 耶馬溪御案内

(第一回作品)

△大正四年▽

4 京都全市鳥瞰図

(大正天皇御即位記念)

5 敵島新案内

6 千歳
古利金剛輪寺

7 寒霞溪独案内

8 京津電車御案内

(漫画)

9 湖東御案内

△大正五年▽

10 高松御案内

11 小豆島御案内

12 道後松山御案内

(第一回作品)

13 坂本名所誌

14 高松
屋島琴平御案内

15 さかみ遊行寺

16 さぬき御あんない

△大正六年▽

17 鎌倉江の島名所図絵

(第一回作品)

18 江の島名所図絵

(丸龍)

19 鎌倉宮図絵

20 英文鎌倉案内

21 鎌倉江の島名所図絵

(笹龍膳)

22 鎌倉江の島名所図絵

23 江の島電車御案内

24 江の島鎌倉名所図絵

(波輪に三ツ鱗)

25 箱根名所図絵

(第一回作品赤大型)

(二三・二四頁)

吉田初三郎先生の光栄

今上陛下御嘉賞

△京阪電車沿線名所図絵 (大正三年)

大正天皇御嘉納

△日光名所図絵・比叡山名所図絵 (大正十年)

皇太后陛下御嘉納

△京都洛北名所・伏見稻荷図絵 (大正十年)

今上陛下 皇后陛下

大正天皇 皇太后陛下

各皇族及び欧州各国皇室献上

△今上陛下御外遊記装幀 (大正十二年)

天皇 皇后両陛下御嘉納

秩父宮殿下御台覧

△高千穂絵巻 (大正十三年)

今上陛下天覧

△愛知県鳥瞰図 (昭和二年)

天皇 皇后両陛下

皇太后陛下

各皇族及び御大典参列内外代表使臣御嘉納

△京都名所大鳥瞰図 (昭和三年)

久邇宮多嘉王殿下御台覧

△伊勢名所図絵 (大正七年)

朝香宮紀久子女王殿下外御四御方嘉納

△水浜電車沿線名所図絵 (昭和三年)

英国皇太子殿下御嘉納

△瀬戸内海絵巻

(大正十一年)

△歓迎和歌絵巻装幀

瑞典皇太子殿下御嘉納

△比叡山頂一目八方鳥瞰図

(大正十五年)

△別府温泉遊覧案内

▲伊香保四万草津温泉巡り

▲房総半島めぐり

▲伊豆箱根温泉めぐり

▲鎌倉江の島三浦半島巡り

▲常磐海浜めぐり

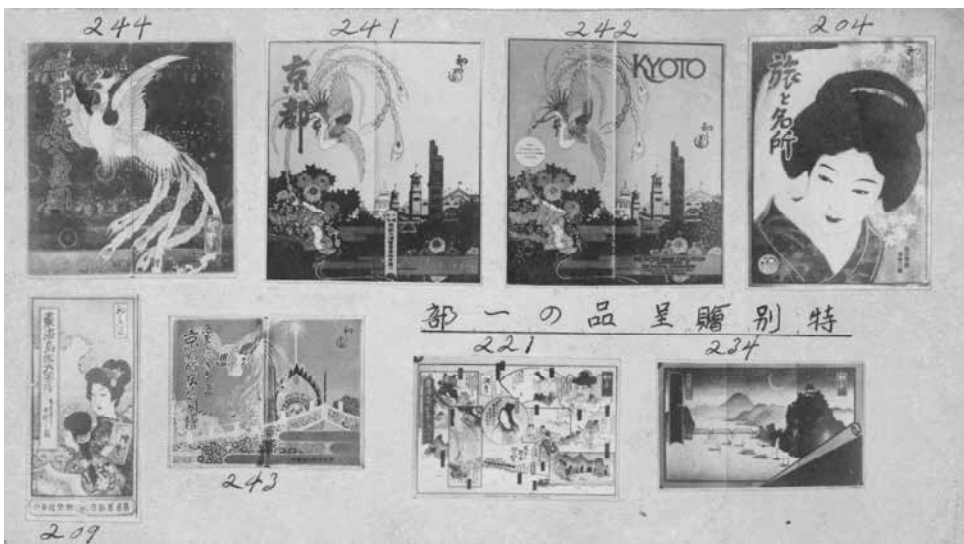
▲日光那須案内

▲富士登山案内

▲門鉄管内十六ヶ所
名所伝説漫画 名所しをり (十六枚一種)

▲日本を中心とせる世界交通鳥瞰図

▲日本全国鉄道旅行案内



本目錄の編纂大成に、多年の星霜と献身的の御努力を拝した、大阪近畿旅行協会幹部の方々であります。茲に其の小照を掲げて、涙ぐまじき幾年の御辛勞に対し謹而満腔の感謝を捧げます。

観光社

▲写真向って左より

木村重一氏

平塚作之助氏

宇山礼四郎氏(案内所主任)

奥田卯三郎氏

▲場所—大阪白木屋内

近畿旅行協会本部

(此処に吉田初三郎先生作品頒布会大阪支部が設けてあります)





〔二七頁〕



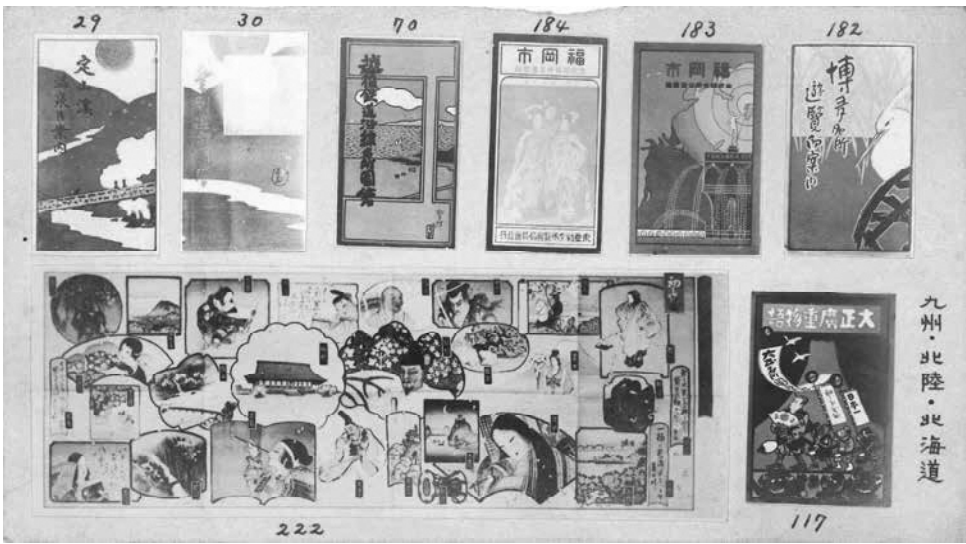
〔二八頁〕



〔二九頁〕



〔一四頁〕

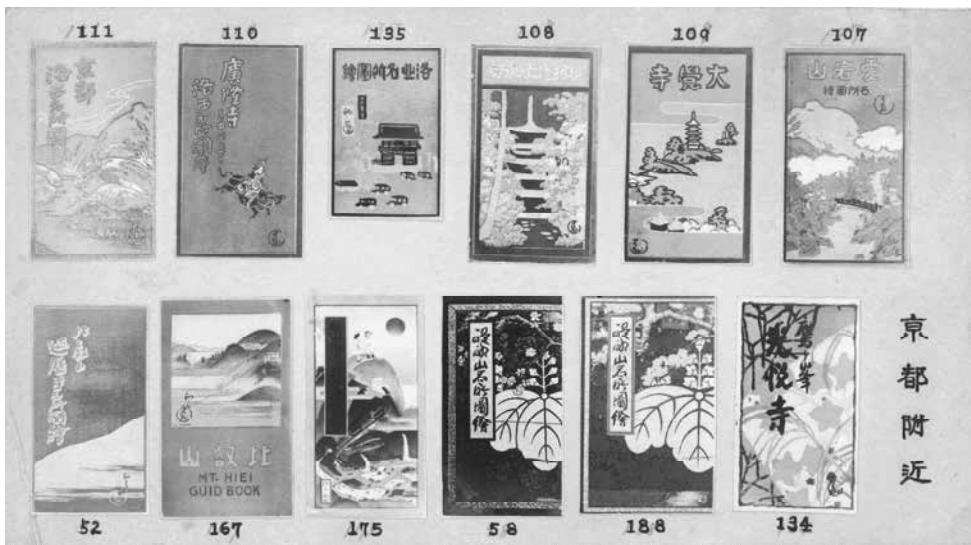


〔一五頁〕



〔一六頁〕

〔二一頁〕

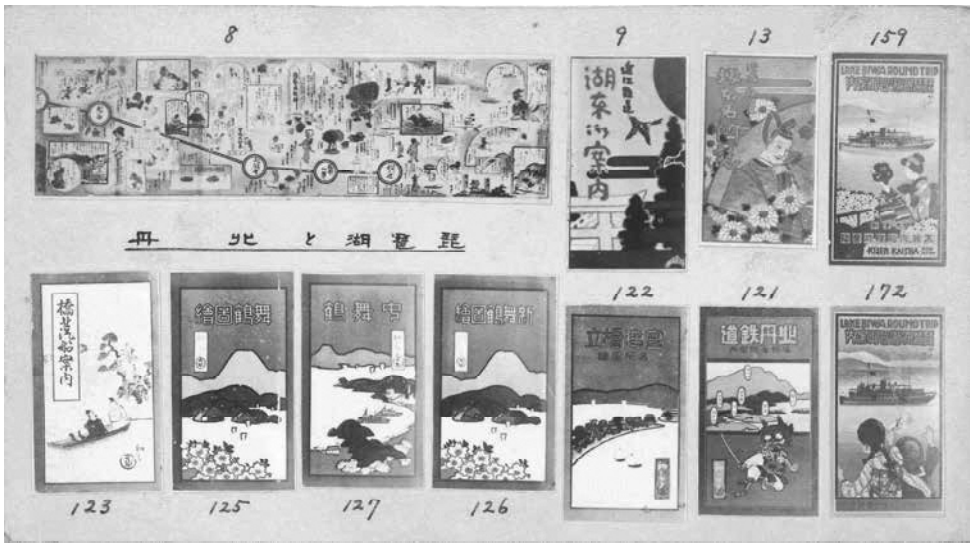


〔二二頁〕



〔二三頁〕

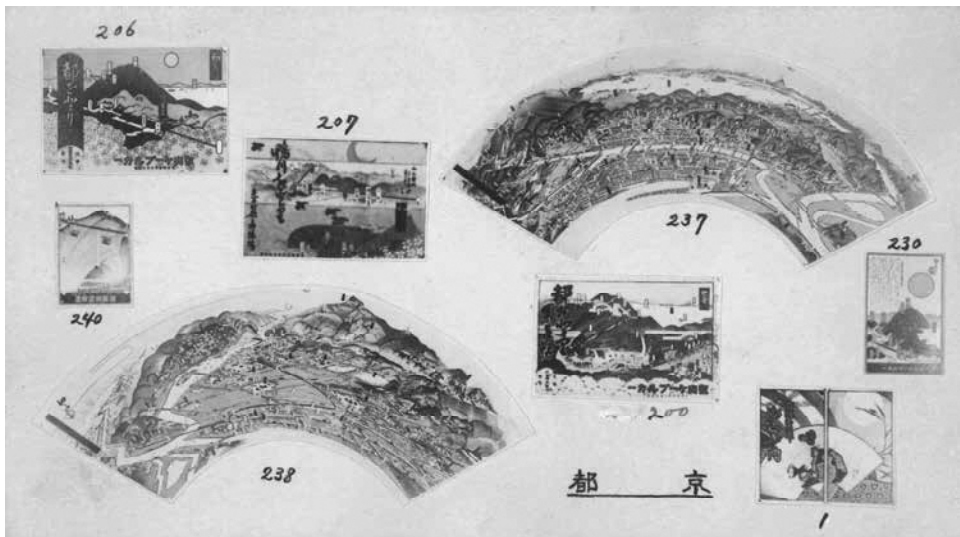




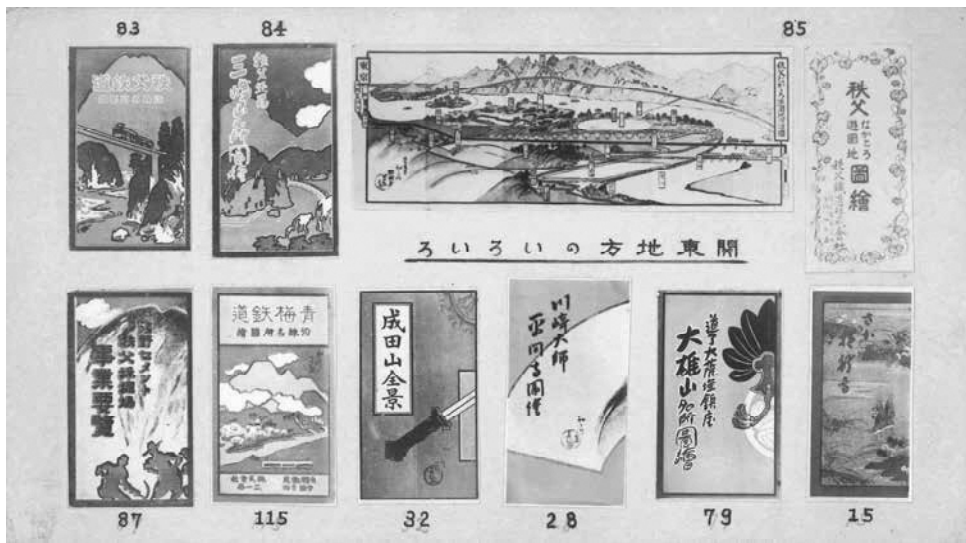
〔八頁〕



〔九頁〕



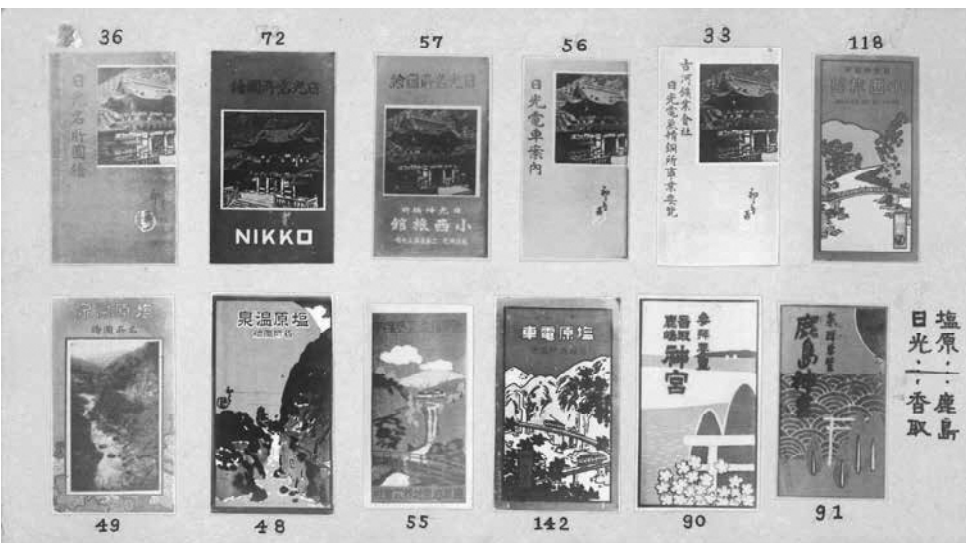
〔一〇頁〕



〔二頁〕



〔三頁〕



〔四頁〕

れ、引つづき第三輯も近く公表されようとしています。御希望の御方は、同氏へ御照会下さいませよう。

▲巻頭写真に添した数字は本目録に収めた品目の番号であります。幸に蒐集諸家の御参考ともなれば此上ありません。

▲本目録に収録した以外の珍品を御所持、若くは御承知の御方は、何卒観光社乃至奥田卯三郎氏迄、是非御一報下さいませよう。斯くして一日も早く完全なる吉田初三郎先生全作品目録を發表したいと只管熱望しています。冀くば絶大なる御高助を賜らんことを。

▲因に本目録の表紙に用いましたのは、明治四十三年頃の吉田先生の作品で、題して「雑魚場の朝」という、観光社秘蔵の珍品を複製してお目にかけたもの、初三郎（よしだ）のサインは、恐らく此頃から用ひられたものと思いません。

昭和四年夏

観 光 社
同人

大阪市北区東梅田町一番地

奥田卯三郎

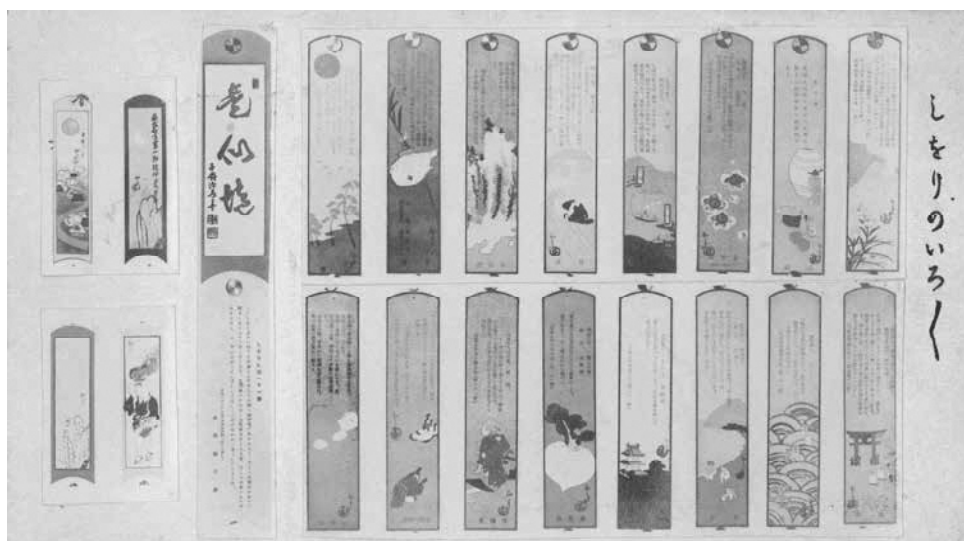
名古屋市外犬山町日本ライン蘇江

観 光 社

電特■犬山三三三六番

振替名古屋一七三三八番

〔二頁〕





表記の目録を、No. 223 「吉田初三郎先生作日本全国名所図絵蒐集目録」・No. 224 「(吉田初三郎先生作日本全国名所図絵蒐集目録、口絵原稿)」により紹介する。主にNo. 223を使用し、口絵のみNo. 224を使用した(欠損の一二、二二頁を除く)。

〔表紙 上段参照〕

〔表紙裏 例言〕

例言

▲本目録は大阪の奥田卯三郎氏、木村重一氏、平塚作之助の三氏が過去五年間にわたる苦心蒐集の結晶ともいふべき、大正二年以降昭和四年一月に至る吉田初三郎先生の夥しい作品を、年度別に収録したもので、之れを観光社の同人が厳密に校訂補正編輯したものであります。

▲従って本目録は、未だ完璧した吉田初三郎先生の全作品目録と申すわけには参りませんが、其れに最も近いものであるということは敢て言い得る次第であります。

▲本目録の巻頭に掲載した写真は、全作品中のほんの一部分にすぎません。他日完全なる全作品目録を発表する際には、其の一つ一つの品目を、必ず写真で発表したいと考えています。

▲尤も奥田卯三郎氏の御尽力によって、吉田初三郎先生作品写真集は 既に其の第一輯と第二輯(約三百種)が発表さ

な生活をしているように思われ、又實際画家等と自ら称する輩は、芸術の世界に遊ぶと号して不規律、不摂生な生活を天与の特権の如く振りかざしているものでありますが、苟も我が蘇江画室の道場に来り集るの士にして、かかる放肆な行爲をこととする者は断じて一人もないのであります。話が思わぬ外にそれましたが、之れは私達同人を御理解下さる上に根本的条件になることと思ひますから、敢て申し上げます次第、再び茲に繰り返して申しますが、觀光社同人はただ努力の二字あるのみ、名所図絵芸術完成という昭和独特の光明へ向つて一意邁進をつづけるばかりで、他の雑念は一切持ち合してないのであります。——「汝等ただ道心を修めよ、道心に衣食あり、衣食に道心なし」とは吉田先生がつねに信奉せらるる家訓であり、又私達道心の信念(同人の語也)なのであります。唯よきものを、よりよきものをと精進する中に、自づと生活は恵まれてきます。ただ生活を得んがためにのみ働く人達には断じてよき作品は生れてこないなのであります。

さて完成せられた原図は、必ず一応依頼者並に其道の専門家に（例えば交通図なれば鉄道省当局に、御陵図の如きは宮内省諸陵頭に）夫々御校閲を願つて、充分誤りなきよう、訂正すべきは訂正し、追加すべきは追加し、茲にはじめて真に完成せられた一枚の図絵原図が出来上つたのであります。勿論以上は一枚の原図に就て申上りましたので、現在の如く諸方

よりの御懇囑相つき、一時に三枚、五枚、七枚と原図を仕上げてゆかねばならぬ場合は、自づと其の時間に於て大差を生じて来ますので、其点は予め御了承おき願上たいと存じます。かくて愈々公刊することに御話が纏まりますれば、早速其の原図を工場に廻して、茲に出版の手順を経皆様の御手許へ差上ぐるべく印刷行程を進捗させるのであります。此の間、極く順調にまいって四週間乃至五週間、若し印刷の複雑(マダ)している場合、或は校正等が非常に暇のいつた場合等は、思ひもよらず延引する時がなきにしも非ずであります。勿論開通式とか記念日とかいうような非常特定の御期限には如何なる犠牲を払つてもおまに合せて来たのであります。凡そ踏査写生が終りましてから図絵の印刷が完成されるまでは約五十日と御承知置願上たいのであります。之れとても無論時と場合、乃至構図印刷等の粗密によりましては四十日乃至三十日或は二十日で出来ないこともありませぬが、何んといつても充分時間をかけて、念を入れたもの程立派な作品として世に発表され、皆様の歓迎をうけている次第であります。

また単に図絵にのみとどまらず、ポスター、雑誌、絵はかき等の印刷も並行して進捗させてゆく關係上印刷には非常な努力を要するのであります。(つづく)

普通当方の原図は天地一尺八寸、左右八尺の絹地に描かれるのでありますが、時としては天地一間、左右四間というような大作（例えば朝鮮金剛山全図、京都名所大鳥瞰図、歴代御陵巡拝図繪等）になる時もあり、又は特殊な形にあわして其の寸法を定める時もあります。

兎もあれ当方の原図は常に斯くの如く堂々たる絹地に描かれていきます上に、踏査より完成に至るまでの労苦と日時、並に使用する高価なる絵の具——画人の間で貴重視されている岩絵具、群青、白緑、丹、白群、朱黄等が実に惜し気もなくふんだんに使われているのであります。——これは先生が後世に対する深い用意の一端でありまして、恐らくは百年二百年の後に於てはじめて其真価を發揮してまいる事と信じています。

さて枠にとりつけられました下図は、線描による細密無類の一枚絵として完成されいよいよ是より着色となるのであります。

(2) 着色より印刷まで

着色はすべて吉田先生の指揮に依り専ら前田虹映名川曠舟君、其他画室にある数名の画生達によって運ばれてゆくのであります。勿論吉田先生も画室にある間は其の側につききりて、絶えず其処此処と訂正の画筆を揮われるのであります。其の用意！苦心!!のほどは、到底門外の人の容易に知り得な

い貴重なものであるのであります。要は実地踏査に於ける幾百のスケッチを完全に活かし、且つは其時に得たインスピレーションをより鮮やかに画面に現すべく画人としての芸術的良心に終始されるものである事を知っていただきたいのであります。

さて茲で一寸前田虹映氏の事を申し上げておきましょう。同氏は吉田先生の門に入られてより蛭雪八年一門中の最高弟として、且つは吉田先生の義弟として私達同人が常に敬慕して止まない、稀れに見るの人格者温厚篤実、寡黙謹厳の人、初三郎式名所図絵の後継者としての実に立派な人であります。

サテ次には御承知の通り吉田初三郎先生の作品は常に細密無類のものでありますから、此の着色の完成までには、いかに少くとも十日間を要するので、而も夫れは文字通り昼夜兼行でなくてはとて十日間に一枚の原図を仕上げる事は困難なのであります。

私は此の文の中で昼夜兼行という文字を既に二回まで用いておりますが、實際蘇江画室に於ける同人達の奮闘ぶりは涙ぐましいものがあり、月一回の休日も自ら進んでとる程の人は一人もなく、一年の内三百六十五日までは、朝の八時から晩十二時、一時迄、食後の休憩さえ惜んで絵の具と絵筆の中に一路精進の道をひたぶるに押し進んでいるのであります。

世には絵かきと云えば、何かこうだらしない、放縦不羈

■資料2 真琴清之助「名所図絵の出版に就て」

(No. 237 『旅と名所』 観光改題第二三号所収)

名所図絵の出版に就て

観光社総務 真琴清之助

(1) 名所図絵が世に出るまで

本紙前号に於て、我が吉田初三郎先生は『如何にして初三郎式鳥瞰図は生れたか?』という題下のもとに、先生の過去の経歴、鳥瞰図創案の動機と経過、現在の希望と抱負、将来に対する理想等を述べられたのでありますが、まことに近世名所図絵創始開発者としての先生が、親から其の過現未を物語るものとして金繡の大文字とも称うべく、私達同人一同感激に耐えなかつた次第であります。

其の内、構図上の苦心を述べらるるに当りまして一枚の図絵が諸氏の御手に入るまでの階梯として

- (一) 実地踏査写生 (二) 構想の苦心 (三) 下図の苦心
- (四) 着色 (五) 装幀・編輯 (六) 印刷

以上六つの経過を表示せられ、其の実地踏査写生並に構想と下図の苦心に就て物語の事を進められたのでありますが、夫れに引きつづきまして、今回は着色、装幀、編輯、印刷の四つの項目に涉り、簡単ながら私より申述べたいと存じます。

即ち吉田初三郎先生、並に前田虹映先生名川朝太郎君以下画室の人達の幾旬に渡る努力の結果、此処に生れ出た一枚の原図が、いかなる用意と、いかなる過程と、そしていかなる苦心とによつて、一部の図絵として世に公表出版されてゆくかを申上げ、観光社出版部の事業に対して皆様の充分なる御諒解と御同情とを仰ぎたいと存じ上げる次第であります。

もとより若輩の私、殊には其道に対して経験も浅く、誌上で斯様なことを申上ますのは甚だおこがましいわけで御座いますが、先生よりの御指命もあり同人一同のすすめに委せまして、私現在の職責上、名所図絵が世に出るまでの過程と其の用意とを申上げること致します。

実地の踏査写生がありました一同が画室に戻り、是からいよいよ構想と下図の苦心がはじまるのでありますが、此間凡そ五日間、真に昼夜兼行の意気組で構想は幾回となく転化変更され、下図には無数の帳り紙が施こされて、一本の鉄道線路すら苟しくも扱われない先生の周到なる注意と綿密なる用意は、此時に最高潮に達するのであります。此の下図の完成こそは、今日世に現われし初三郎式名所図絵の根本をなすものでありますから、恐らく先生としては何処まで訂正しても是れでよしといわれる時はありますまいと思われます。

かくて略々訂正のすんだ下図は、此を枠に取付けて、画絹に写し愈々原図執筆の段取となります。

『リスト』の誌上で、私に世界の名所図絵を描くことを希望され激励されたのであるが、其の期が余り遠くないことを、私は深く祈るものである。

◇

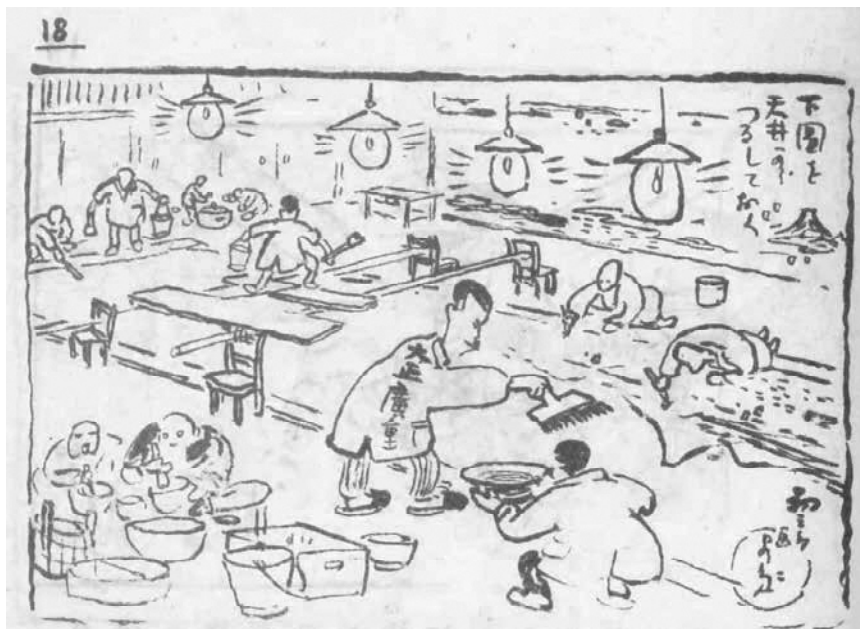
然りとは言え、私は素より一人の貧しき労働画家である。意気に於ては既に広重を凌ぐというと雖も、此れを實行するに当つては、切に江湖諸賢の絶大なる御高庇と御侠助に俟たなければならぬのである。

冀くば初三郎をして日本全国名所図絵完成の初志を貫徹せしめ、ひいては世界の名所をも、日本人の手によつて後世に伝えしむるべく、私の仕事に充分の御理解を以て、温かき御賛助を拝したく、幾重にも懇願し奉る次第である。創刊の誌をかり、平素抱懐する愚見を述ぶること右の如し、願わくば了恕あらんことを。

(日本ライン蘇江仮画室にて昭和三年晩春の一日記之)

金言

汝等ただ道心を修めよ、道心に衣食あり、衣食に道心なし。
一 是れは吉田先生がつねに信奉せらるる家訓であります



大正12年(1923)刊『大正広重物語』(No.220)に掲載された鳥瞰図作成風景

糊塗^{こと}するためには用いたものではない。かくして一枚の原図を仕上げるまでには綿密にして要領を得たる態度と、幾百枚かのスケッチと、数回にわたる構図の変化と、数枚の下図とをまっけて、はじめて着色にかかり得るのであつて、決して感興にまかせて一夜^{いちや}漬^{つけ}に描きあげたのではないのである。

◇

私は曾^{かつ}て、私の作品が一つの型にはまってきたという事を痛感して頗^{すこぶ}る戒心^{しん}した次第^{しだい}であるが、然^{しか}し、慘憺^{たん}たる構図の苦心の結果として当然、到達^{とくだい}すべき渾然^{こんぜん}たる一境地であつて、其^それが一つの型を作り、即ち今日の初三郎式を完成したのである。しかく渾化^{こんか}されるまで、私は構図を練^ねつて止まないのである。

又、或^{ある}時は鉄道省前運輸局長の種田^{おいた}虎雄氏から日本独特の○画^えのようだと批評されて、苦笑を禁^こじ得なかつた事もある。要するに初三郎式鳥瞰^{おん}図は中心を極度に拡大する結果、此^この名評^{めい}を頂^{いた}いたことと思うが、是^これに対する私の主張は、前にも述べた通り、断じて平面図の立体化ではないのであつて、どこまでも中心地点を定めて、其^その麾下^{きか}に附近の山川名所を隷属せしめるのであるから、勢い止むを得ない構図で、其^そ処^こに私の名所図絵の特長があり、又其^その方

が交通と名所との關係を教えるには解^{わか}り易^{やす}いのである。

さて此^この頗^{すこぶ}るローマンチックな描法が、果して外人に理解されるか、どうかという問題であるが、成^なる程^{ほど}欧米で製作される鳥瞰^{おん}図は文字通りのバーツ・アイ・ビューで、理性の發達した彼等としては当然のことである。其^その理智の眼^{まなこ}を以^{もつ}て私の名所図絵を見た時、はたしていかなる感を抱くことであろうか。恐らく日本人は突拍子もないものを描くと驚嘆して、之^これは実用にむかないと言ふかもしれない。然^{しか}し私の信奉^{しんぽん}する『奇麗^{わが}で解^{わか}り易^{やす}い』との信念が、一度外人に理解された時に於ては、恰^{あた}も創作当初に於て、私が日本に於て曾^{かつ}て経験した如^{ごと}く、其^その最期に於て必ず私の図絵を重宝^{じゆうほう}がつてくれることと信じている。

昨年、大連で、滿支滞在中の作品を展観した時、参集した支那人及び一部の白人の殆どすべてが、私の絵を理解して大変稱讚して呉^くれた点に鑑^{かん}みて、私は大いに自信を得ているのである。

幸い昨年は、半歳を費して滿蒙、南支、朝鮮を遊歴し『滿蒙を中心とせる歐亞連絡交通鳥瞰^{おん}図』其他^{その他}十数種の作品を發表することになつていたので、此^これを機会の第一歩として、将来必ず世界各地の名所と交通を、初三郎式名所図絵に収^ぎめたいと期待している。曾^{かつ}て本邦旅行雜誌界の權威『ツ

写生は、手で描くのではなくて足で描き、頭で描く絵であるから、其のホールビューを握る為には、ある一地点の中心とすべき所を、スバヤク捕えねばならない、是れは構図に於ても同様で、常に一つの中心を定めて、是れに基礎を置き、更に部分的のスケッチを幾百枚となく集め、是れを全交通にあてはめて、始めて山水の布置が決定せられるのである。是れが仮りに平面図を立体的鳥瞰的に再現するのであれば、其の骨組の根本は、自然のままの山水布置にあるのであろうが、私のは決して然うではない。従って私の作品に於ては、必要と思われる中心点が、随所で拡大されて、他は其の交通関係を示しつつ、全体の調子を繋いでをるに過ぎないのである。

されば一本の鉄道線路を書き入れるのにも、全体の釣合いや角度を充分考えねばならない。そして夫等に中心をおきつつも、実際の風光気分を失うまいとする所に、画家としての私の言うべからざる苦心がひそんでいるのである。



私は此処で一吋模型図に就て言及したい。世には莫大な費用と時間を費して模型をこしらえ、是によって地理地勢を教えようとところみる方々もあるが、第一模型では近景と遠景の区別がつかない。又是れを見る人の位置によつ

ては全然別種の地勢や風光を教えることになって、甚だ残念に思うことが屢々である。殊に模型では携帯に不便で、イザという場合に、ポケットから出して参考にするわけにはまいらぬ。結局これも専門家以外には極めて活用力の少ないものであると断定することが出来る。現在世に流布されている案内図の多くは、横に長い折畳式のものであるが、是れは私の創案で、何処までも携帯に便利なようにとの私の老婆心から発したものである。同様の意味で、鉄道旅行案内を従来の縦本から横本にしたのも私の原案で、是れは、日本の活字を読む上にも便利な様にと考えた結果である。恐れながら、今上陛下の御外遊記も、此等の意味に於て横本に御装幀申上げた次第である。

さて斯くの如く、私の図絵は横に長い画面を有するため、構図をまとめるには実に惨憺たる苦心を要するのであるが、また一面この形式を創出したる事に依つて初三郎式鳥瞰図の特色を發揮し得るわけである。かえりみて古人の名所図絵を見るに、多くは一區画、一部分の景觀のみを描き、一度構図に窮すると、雲とか霞などをかいてごまかしているようである。夫れは私の芸術的良心が許さぬ所で、勿論私も時にかすみを用いる場合もあるが、それは距離と空間を示す時のみに限つて用いる手法で、決して附近との関係を

今上陛下四国御巡遊に際し、二荒伯爵に随行して鳳駕に供奉し奉りたる事共、思い合せて私は常に感泣を禁じ得ないのである。



大正十二年以降、現在に至るまでの足跡は、世人の記憶に新しいことでもあるから、是れを省略して、最後の結論に向いたいと思う。但し私として忘る能わざる数々の仕事は、此の年以降次第に激増して、中にも今上陛下御外遊記の装幀を謹筆し奉り、又大正天皇御成婚記念としては『高千穂名所図絵』を謹筆献上し『比叡山四明ヶ嶽山頂鳥瞰図』は是を瑞典皇太子殿下に奉献する等、幾多の名譽を重ねる内、曩に出版せられし『鉄道旅行案内』改訂に当り、再び装幀と挿絵全部の執筆を蒙り、是を完成したのである。殊に先年（大正十年）日本郵船会社より日支航路案内として発刊せられし、雲仙名所図絵には、特に

Drawn by Mr. Hatsusaburo Yoshida, Popular

Known as the "Hiroshige" of Present age

と紹介せられ、私の責任も世界的に漸く重大となったのであるが、私は既に当代の広重を以て諾んぜず、曾ては私に冠せられし大正広重の名を潔きよく江湖に返還すると共に、意気に於ては昭和に於ける超広重の覚悟に立脚し更に一層

の努力と苦心を以て、現在、満州、支那、朝鮮方面の各図絵を執筆研鑽しつつあるのである。

三 構図上の苦心と将来への抱負

私の過去の業績は略々以上で尽きる。思えば夢のような、旅から旅への十七年であった。直路ただ一日の如く邁進を続けて来た。今日かえりみれば実に思い出は尽きないのである。以下此の論の終末をむすぶべく、近世名所図絵製作上の用意とか苦心とか云うべきものを一通お話致したい。

一枚の図絵が諸什の御手に入るまでには様々な経過を取り来っているのである。即ち

- (一) 実地踏査写生 (二) 構想の苦心 (三) 下図の苦心
- (四) 着色 (五) 装幀、編輯 (六) 印刷

大略右の様な階梯を経て、世に公表出版せられるのであるが、其の内、実地踏査写生の辛苦に就ては、前に一寸述べておいた通り屢々身命を賭するような危険に遭遇することも一再ならずである。而し是れは常に細心の注意をさえ払っておれば、必ず防げることで、其れも習うよりは慣れる、経験をつむに従って危険にも慣れ、用意も周到になつて、幸い今日まで無事活躍している次第である。殊に私の

生活の悲惨とを味わいつつ、孤影飄然として南船北馬の旅をさまよいつづけたのである。

この記憶すべき創世紀時代の追懐の中には可なり面白い足蹟も有る。今その一つ二つを示すならば、大正四年には大正天皇御即位の大典を京都に行わせらるるに当り、島華水博士の指導を得て京都市鳥瞰図作成の大任を遂げ、時恰も内外貴紳の入浴するに及んで、其の称讃を一身に聚むるの光栄を得、面目此上もなき次第であつたが、これ即ち近世日本に於ける大都市バーズ・アイ・ビューの嚆矢となつたものである。

又大正八年には、北海道に開道五十年記念博覧会の開催されしを機として、札幌鉄道局の命を拝して全道交通鳥瞰図作成のため、北海の山野を跋涉し、人跡絶えたる狩勝の深山を攀じ登りつつ、一面白皚々たる雪を踏みしめ、猛獣の眼を恐れつつ、写生に従事、更に翌大正九年には、引つぎ樺太交通鳥瞰図を完成すべく、盛夏八月の候を、駆逐馬車に揺られて、分厚い冬外套に身を固め、真夜中の深林を馳走しつつ、寒気に耐え兼ねて、部落の山家に火を焚いて暖を取るといふ、深刻極まる避暑旅行をつづける等、すべて野戦的の経過を繰り返したのである。嗚呼難い哉……労働画家のこの仕事。



大正九年、最終の一日は、堅氷と烈風に戦いつつ、九州雲仙岳踏査に終了し、明くれば大正十年、此の年も亦前述の如く『鉄道旅行案内』挿絵執筆のため、製作期間五箇月を費して、つぶさに辛苦を重ねたのであつたが、予期成績の半途をも満足せず、遺憾此上もない次第であつた。然も世人は是を迎うるに多大の称讃を以てし、一年有半にして、四十余版を重ねるに至つたのである。

大正十一年新春劈頭、東京平和博覧会へ鉄道省より出品の『日本を中心とする世界交通大鳥瞰図』揮毫の命をうけた。是れは天地一間半、長さ八間という龐大な作品で、とても是れを收容して執筆する場所がなく、大いに苦しんでいる時、偶々浅草伝法院に在る天台宗総務、大森亮順師の俵助を得て、伝法院の本堂を画室として提供せられ、遂に此の大作を完成するを得たのである。此の大作に引つづいて、時の鉄道大臣より、御来朝中の英国皇太子殿下へ献上の『瀬戸内海絵巻』並に日本旅行倶楽部より献上の『歓迎和歌絵巻』（和歌一尾上柴舟博士筆）の二巻を謹筆するの光栄に浴した。斯くの如くにして私の仕事は、国際的儀礼の大任に当るを得、英国皇太子殿下より感謝と讃辞の御言葉を賜つたこと、思えば身に余る光栄にして又、此年十一月には

も、その名所案内、交通指導の智識として、官衙に、駅店に、旅館に、温泉に、或は市井の十字街頭に、巧拙とりどり、其の健かな成長と活躍の足跡を見るのであるが、翻つて創始当初を思えば全く今昔の感に耐えないものがある。此の新しく出現した異様の案内図は、当時平面図や測量図を見なれた人の理性に訴えるべく、余りに調子の高すぎたためか、是れを 陛下の如く『奇麗で解り易い』と認めて下さる方は殆どなかつたのである。全く何度繰返しても有難いのは、此時の 陛下の御言葉である。

然し天下は広い、やがて鳥瞰図の認められる時が来た。夫れは大正三年、大阪商船会社要路の人々が、私の仕事に深き理解を持つて激励声援せられ、当時別府航路のクイン（初代）紅丸（現在は二代目）を中心として、耶馬溪、宮島、寒霞溪、道後温泉、琴平、高松屋島、別府温泉等の名所図絵を順次公表するに至つたことである……吁！此時の感謝こそ私が永久に忘れ得ぬ深い印象となつたのである。就中、道後温泉図絵製作の依頼者、日本の伊予絋王として名声を世に膾炙さるる立志伝中の人、田内栄三郎氏が、『何んでもかまわぬ、日本一と云わるる人が好きだ』との一言は、私を又新に鼓舞し決心せしむるに、どのくらい力強い響きがあつたことか。

この前後に於て、私は二人の恩人を得た。そして現在に至るも変らぬ愛撫と親交とをつづけて、常に激励指導の任に當つて頂いて居る。即ち一人は最近まで東京市電気局長として令名あり、当時鉄道省勅任の大官宙堂生野団六氏、今一人は別府温泉の民衆外務大臣といわるる亀の井ホテル社長油屋熊八氏である。



かくの如く、私の身辺には次第に知己の名士を得るに至つたのであるが、まだまだ普く世間に私の仕事を理解して頂くまでには至らなかつた。其の後凡そ七年間あらゆる困苦艱難と戦い常に貧窮をたえしのびつつ其名所地開發進展に効果あるを力説宣伝の折から、始めて政府当局に見出されて執筆したのは日本より鮮満への交通鳥瞰図であつて、それは当時未だ鉄道院と呼ばれていた頃の交通宣伝ポスターであつた。これが即ち大正七年であり、以降大正十年、私が鉄道省の命を拝して『鉄道旅行案内』の挿絵全部を揮毫するため、日本全国に写生旅行をこころみるまで、思えばなかりし幾星霜の憂き歩みよ。或時は涙しつゝ名所図絵の永遠性を説き、或時は活動俳優そのけの冒険と軽業を演じつつ大自然の踏査に當り、朝に東方の俛に訴え、夕に南国の知己を説いて、つぶさに人生行旅の苦しみと、芸術

ために生き、名所図絵のために死すべきを期して聖恩の万分之一に報い奉るべく、即図絵報国の決意を、此時深く心中に樹立したのである。

二 創作当初の鳥瞰図と其の経過

かくして私は望洋たる日本全国名所図絵完成の大理想に向つて其の第一歩を印したのであった。私の考えでは、名所図絵の生命は飽まで自然を巧に捕えて、自家薬籠中のものとなし、一目してその美しき山容水態を髣髴せしむる所であり、幾何学的な測量図や平面図は、専門的以外に其の真価の甚だ少いのを言明して憚らないものである。即ち万人が見て楽しみながら解り得べきもの、之れが即ち私の作品の生命とする所であり、陛下の御言葉以来、私の芸術に対する信条となつたものである。此の私の考えが正しいか正しくないか、私は之を満天下に公示してその批判を乞わんとしたのである。

広重の名所図絵は名高く、又不朽の作品である。然し広重はまさか生前に後世の為などとは思つていなかったらう。ただ有りのままの風光景觀を筆にしたに相違ない。此の率直にして大胆な自然描写が当時極めて人為的で巧緻を極め

た浮世絵の中に立つて、次第に特異な光彩を放ち、其れがまた今日の人文史に大変貢献しているのではないか。然し私の作り出さんとする名所図絵は単なる一枚のスケッチではなく、幾十枚幾百枚のスケッチが集まつて其処に一個の鳥瞰的図絵を構成せんとするのである。即ち部分々に就ては飽まで忠実な自然描写であるが、一度是れを総合する時に於て、極めて人為的となり初三郎式となる。つまり私の個性が十分に画面に溢れているのである。既に広重とは其の出発点を異にし、目的を異にする以上、是れは当然来べき帰結として深く認識さるべきである。かくして吉田初三郎が創り出す近世名所図絵の真価は蓋し未知数とは言え、胸中已に勝利の光明が脈々として波を打っていたのである。勿論創生当時の作品と、現在の作品との間には相当の距離と成長の相違があるが、夫れはスチブソン發明当時の機関車と、現代の機関車との相違であつて、其の根本的思想に於ては毫末の変化もなく、単に色彩、描線、構図に於ける改善進歩であり、是れは今後共、何処まで押し進めてゆくものか、私すら見当がつかないのである。



さて現在に於てこそ私の創始開発した鳥瞰的案内図は、治く天下に流行宣布されて、見渡せば津々浦々のほてまで

恩師の訓言に鞭撻して遂に其の図を新式なヌーボー式図案風に独創して完成した。が、是れは単に描いたというだけのことで、自分としては何等の感興も持てなかつたのである。図らざりき、之れが私の今日の事業の筆初めとなり、処女作にならうとは。

◇

大正二年は亡友久佐木義房と共力して京都に女子美術学校創立の奔走に暮れて、明くれば大正三年其の夏私はともすれば、鈍り勝な心を引立てて九州耶馬溪に写生旅行をこころみ、溪中の古刹羅漢寺指月庵に滞宿し、自己信念の安んぜざる、常に沈思輾転して山溪の雨声に対し

五月雨や、指月庵裡のふる行灯

の一句をよんで、転た人生の寂寞に堪え得ざりし折柄、京阪電車太田氏より飛檄あり、曰く……

『今回 皇太子殿下（今上陛下）本社沿線男山八幡宮へ行啓あり、貴賓電車内に貴殿揮毫の名所案内を備え置きたる所、殿下には親しく御手に取らせ給ひ、畏くも『是れは奇麗で解り易い、東京へ持ち帰って学友に頒ちたい……』との尊き御誼、早速教部献上したるに殿下には殊の外の御喜びあり、本社の光栄之にすぎず、貴下のためにも光栄余りあるものなれば、取り敢ず是れを通知する……』

という意味の来信であつた。

此の飛行に接した私は、指月庵の一隅に、端座瞑目して、感慨無量、深く深く自己の内心に顧みて静かに考えたのである。自分のような不束な者の仕事に、思いもかけず殿下の御感賞にあずかるとは光栄此の上もないことである。初めはあんなつまらない仕事と思つたが、是れは何だか無意味なことではなさそうだ。よし！一つ日本全国の名所図絵、否朝鮮、満州、世界中を、此の名所図絵に描きあげて、不朽の仕事としたらどうだろう。此の仕事在完成するということは、幼い時に深く胸中に刻みこんだ『虎は死して皮を残し、人は死して名を残す』という考えと一致しはしないか。私は茲に現代の名所図絵を残して、後の世に当年の名所と交通の関係と発達の状態を伝えたならば、一つには人文史の材料ともなり、一つには当代特有の名所図絵という一種の芸術を示すことも出来よう、とこう考えたのである。

と同時に、電光の如く私の脳裡にきらめいたのは『奇麗で解り易い』という 今上陛下の御言葉である。今日に至るまで、私は私の仕事の大切な標語として、此の玉旨を奉戴しているもので、此の御言葉こそ、実に私の一生を決定する唯一の動機となつたもの、顧みて 聖恩の無窮を思う時、感激の涙滂沱として私の双頬につたい、誓つて名所図絵の

のを、無智な低級なペンキ屋や画工に一任して顧みないのは甚だ誤った考えではあるまいか。夫れに洋画家は日本画の後進とは違つて、学費の支給にも困難を感じている折でもあるから卒先して洋画界から社会の為に働く応用芸術家が出るように其道を啓かなければいけない。自分はつねに此事を考えていたけれどまだ人才を得なかつたが、幸い君には一片の熱誠もあり努力もある。又凶案背景等を書いた経験もあるのだから、此の方面の仕事には最も適した人だと思ふ。何うだ、社会のため一つ君が洋画界から出て此の仕事を始めてみては……。」とこういふお話であつた。

◇

今でこそ此の御言葉は、私にとつて天来の福音ともみろべき尊い慈訓であるが、其当時私は実に悲しかった。折角純正芸術を志して精進している私にペンキ屋になれと云うのである。然し先生の年来の恩誼に対しても、私は奮つて先生のお考えを実現するという決心をして

『友よお前は右へゆくか、俺は独りで左へ行くぞ』

と、悲壮な覚悟の下に、断然として過去の世界と手を別ち、茲に民衆芸術の別天地を創造して、いよいよ街頭へ打つて出ることになつた。

此時に当り有難くも懇篤なる賛成の意を表して、身に余

る推薦状を賜わり、私をして華々しく世間へ送り出して下さつた方々こそ、京都商業会議所会頭浜岡光哲氏、当時の京都市長川上親晴氏、同高級助役加藤小太郎氏、並に京都帝国大学法学博士神戸正雄氏、同末広重雄氏、文学博士深田康算氏等で特に種々な便宜を与えて下さると共に、恩師鹿子木先生は、事業に対する社の顧問となつて下さつたのである。之等諸名流は、実に今日に至るまで私の忘るることの出来ない、私の事業の擁護者であり督励者であると共に、其時給つた御推薦の一字一句は、終生牢記すべき金玉の文字であつたのである。

其時の仕事としては、実業界に有名な下村正太郎氏の依頼をうけて、京都大丸三階楼上に児童室の壁画として周囲二十間の大作お伽づくしを描いたことや拓殖博覧会の天井画、壁画、さては枚方菊楽園の大背景を書いた時など、今の近藤浩一路君等が大いに助手として働いてくれたものであつた。

さて此の経営中に、京阪電車の専務太田光熙氏から、京阪沿線の名所図絵を描いてくれという依頼をうけた。それは大正二年も春まだ浅い頃でうら寒い淀の川風に吹かれながら、外套の襟を聳てて幾度か自分の将来に就て嗟嘆しつつ、兎も角写生をすまし、脆くも倒れようとする自分を、

プの養成は、其の善導よろしきを得た時、必ずや従来の武士道にとつて代るべき重大な使命を帯びたものである。又是れと併行して都人士間に喧伝さるる旅行熱は一面繁雑な生活から離れて大自然に親しみ、精神の休養を計つて事務の能率を速進せしめる妙薬であると共に、一面交通智識の普及となり、歴史地理の趣味ある実地見学となつて、甚だ結構な流行の一つであると思う。私は自分の天職として、絶えず日本全国に写生旅行をつづけ、殊に昨年は前後半年に涉つて、満蒙、南支、朝鮮の踏査写生をこころみた事であつたが近年殊に目立って、全国至る所、津々浦々に至るまで流布され、重宝がられているのは、例の鳥瞰的案内図である。私は是れを見る毎に、其の作者の誰人であるを問わず。何とも言えない懐しさと涙ぐましいほどの嬉しさを感じるのである。丁度里に出した愛し児に絶えて久しく邂逅うような心持で、私のまいた一粒の種が、いつか亭々と茂りつつ、あまたの若木にとりまかれているのを見る、其の造林の喜びである。

私が旅行先で、一葉の鳥瞰図を手にしつつ、此の喜びに浸っている時、油然として思い起すは、私に此の一粒の種を与えて下さった恩師鹿子木孟郎先生の慈訓と、一握の生命を恵み賜わりし畏くも尊き 今上陛下の御言葉とである。



夫れは今から十七年前、大正元年のことである。これよりさき私は東京赤坂溜池なる白馬会研究所を出て日露戦争に出征し、満蒙の野に転戦しつつ無事凱旋後、郷里の京都に起臥して鹿子木先生の門に入り、再び絵筆の修練をとる一方、溜池当時の同窓で京阪に在住した、野田九浦、近藤浩一路、松田俊夫、宇和川通諭氏等の面々がこしらえていた溜池会とも往来し、又一方では泉鏡花、喜多村緑郎、上田敏、柳川春葉、北島春石、太平野虹諸氏等の賛助の下に演芸雑誌の発行を目論見、或は当時京阪で既に一家をなせる洋画界の人達が集っていた双鳩会に加わつて、矢崎千代二君や松田俊夫君等と一緒に幹事などをしていた時分のことである。

鹿子木先生は第二回の仏蘭西遊学から帰朝せられてまもない時であつたが、一日私を膝下に呼んで曰われるには、『自分は長らく仏蘭西にいたが、あちらでは広告や、辻々に貼るビラなどは、皆一流の大家の画くもので、大家の画いたということは其の商品の内容を示していると言ふことになつている。然るに日本では夫れと反対で、美術家が民衆のために何かするのを非常な恥辱と思つている。広告とか看板とか案内とか云う、直接国民の芸術眼に訴うべきも

の星霜を経て、初めて後世の人文史上に多少とも貢献する所あるべきを固く信じているものである。私の此の仕事に對しては、既に充分の理解と同情とを持つて、常に多大の後援と激励とを賜つて居る方々もあるが、併しまだ、これに就いて全く理解を給わるを得ない方々もある。で、私は爰に聊か自分の仕事の説明をして諸賢の御一顧を給わりたいと思ふのである。

私の仕事……日本全国名所図絵の完成ということをも簡単に申上げれば、彼の有名な東海道五十三次の絵の作者、一立斎広重のしたあとを現在に活かし、更に是れを総合して一幅の図絵となし、今日の画家が時代のお陰で有し得る洋画と日本画との渾化の上に基礎を置いて、是れに色彩、描線、図様を働かせ、真に特色ある近世名所図絵を完成し、之れを後世に伝えて大正昭和時代に生れたる日本特有の芸術としての存在を示し、人文史上に明白な印跡を遺したいといふのである。

従つて私独特の鳥瞰的描法は或は当世の画壇に容れられず寧ろ異端者として蔑視せられているかもしれぬ。されど私が創始執筆して以来茲十数年間に於ける鳥瞰的図絵の流行利用、駸々として止まるところなきを見て其の實際的効果の如何に素破らしいものであるかを明白に物語つてい

るのである。そこに時代の変遷がある……。曾ては駕籠にゆられ蓮台にてわたりし東海道に、鐵路成り、鉄橋なり、隧道成り、更に自動車の、めまぐるしくも、さかんなる活躍を見るにつけ、私はここ五十年を出でずして、必ず飛行機万能の時代の来るべきを確信している、其時に於て曾て地上に残されたる交通状態を如実に物語るものは、我が鳥瞰図にあらずして何ぞ。蓋し現代に於ては名所と交通の關係を示して旅行者の便益に資し、併せて交通の発達と改善を促しつ、以て百年の後に光彩を期するもの、恰も一立斎広重の画風夙年振わず、風景画の新機軸を樹立するに至つて次第に民衆の喝采を博し、後世に尊重せらるると其の軌を同じうせるものではあるまいか。

然し広重と私とは、其の軌を一つにせるも其の出発点と目的とを異にしている。以下前述の概念に就て多少の説明を試みたいと思ふ。

一 鳥瞰図の流行宣布と其の出発の動機

時代の変遷と共にあらわれた様々な社会現象の中には、随分擗蹙すべき風潮もあるが、又大いに尊重すべき風習もある。中にもスポーツ熱の勃興に伴う、スポーツマンシッ

郎式鳥瞰図が生まれたかを皆さんの前に書いてみる事にした。

近頃屢々、私の画く名所図絵に就いて、どうして其んなものを描くようになったか、またいったい何んな動機であるか、其の描法を編み出したのか、其の動機や生立ちをきかせてくれと、可なり各方面からの御質問があるのであるが、其れにお答えするためには、事の順序として、勢い私が画家として、そもそもいかなる志しを以て生れ又どういう覚悟を以て歩んできたか、先ず夫れをお話しなければならぬ。

私は幼少の頃、まだ六つ七つの時分から画のすきな少年であつた。思ひ出せば其の頃小学校の教科書には、徳川末期の巨匠として芸術界を風靡した円山応挙の逸話などがのせてあり、小供心にも彼が一匹の野猪を写生するために少なからぬ苦心をしたという物語などが深く脳裡に印象されて自分も将来は必つと立派な画かきになりたいと念じていたのであるが、運命は容易に夫れを許してはくれず、或る時は友禅図案の絵師の家に丁稚奉公をつづけ、又或る時は京都三越の友禅図案部に、日給四十五銭の職工となつて、少青年期の前半を過す等、第一義的志望を、ジツと押え忍ばねばならぬ時代もあつたのである。

其後、单身東京に出て、今日洋画界の母体とも云うべき

白馬会の研究所に入り、又郷里京都に帰臥しては、恩師鹿子木孟郎先生の門に入つて、茲に漸く素志の正道を踏むを得たのであつた。是れが私の鳥瞰図創案以前の、総ての経歴である。

◇

一体、自分で自分のことを彼れは是れ言うのは如何にも片腹痛いことで、其れも自分の暗い方面を思い切つてさらけ出すのならまだしも、其れと反対に、自分の明るい方面、たとえば長所とか得意とか苦心とか云うものを、人前にさらけ出すことは、心ある者の甚だ潔しとしない所であるが、今私が述べんとすることも、矢張り私の理想・希望・抱負と云つた様なもので、其れに伴う苦心、長所、忍耐などいう美しい明るい方面のことが多く、僅かばかりの技術と、取るにも足らぬ些少の名声とを以てしては、何とも心苦しい次第である。而し拙いながら私の仕事には理想も自信も抱負もあつて、仮令よそ目には自惚れと思われても、私の生命の総てを打込んでしていることであるから、夫れを聊か申上げてみたい。

過去十七箇年間、私が懸命の努力と希望とを打込んで来た事業は日本全国名所図絵の完成という仕事である。而も之れは遂に私一代を以て完成し得べくもなく更に五十年百年

5 資料紹介

本報告書「吉田初三郎関係資料目録2 絵はがき等」に掲載した資料のなから、左記の資料を翻刻紹介する。

1 吉田初三郎「如何にして初三郎式鳥瞰図は生まれ
たか？」

2 真琴清之助「名所図絵の出版に就て」

3 『吉田初三郎先生作日本全国名所図絵蒐集目録』

1は、吉田初三郎が、みずから鳥瞰図誕生とその後の展開、将来への抱負について記したものである。2はその続編ともいべき内容で、初三郎の指示により観光社のスタッフが筆を執った。1については、平成一九年度特別展図録『パノラマ地図と鉄道旅行』にて紹介したところ、諸論考にて参考資料として活用されてきた。同書が品切となつて久しいため、ここに再度掲載する。2は、初めての翻刻である。3は、昭和四年当初時点における初三郎作品目録である。いずれも、原文は旧仮名遣いだが、現行の仮名遣いにあつたため。また、句読点を補つた場合がある。当時の社会的通念により記されているため、現在ではふさわしくない箇所があるが、歴史資料として紹介する。なお、1にはすべての漢字にルビが付されていたが、本書では現在なじみの少ない用字や言い回しにのみ残した。

■資料1 吉田初三郎「如何にして初三郎式鳥瞰図は生まれ
たか？」

(No. 235・236 『旅と名所』観光改題第二二号所収)



如何にして

初三郎式鳥瞰図は生れたか？

吉田初三郎

曾つて大阪時事新報社の需めにより、近世鳥瞰図苦心談と題して私の過去の経歴、鳥瞰図創案の動機と経過、現在の希望と抱負、将来に対する理想などを述べてみた事がある。私は更に本誌上に於て、表題の如く、如何にして初三

収蔵資料調査報告書

収蔵文書調査報告書 1	「白川金色院」と恵心院	1998年(平成10)
収蔵文書調査報告書 2	笠取地域の古文書	1999年(平成11)
収蔵文書調査報告書 3	上林三入家文書	2000年(平成12)
収蔵文書調査報告書 4	宇治上神社文書	2001年(平成13)
収蔵文書調査報告書 5	巨椋池漁師仲間文書	2002年(平成14)
収蔵文書調査報告書 6	上林春松家文書	2004年(平成16)
収蔵文書調査報告書 7	白川・藤川家文書	2005年(平成17)
収蔵資料調査報告書 8	戦争関係資料	2006年(平成18)
収蔵資料調査報告書 9	上林春松家文書 2	2007年(平成19)
収蔵資料調査報告書10	幕末の銅版画	2008年(平成20)
収蔵資料調査報告書11	宇治市の写真資料 1	2009年(平成21)
収蔵資料調査報告書12	宇治市の写真資料 2	2010年(平成22)
収蔵資料調査報告書13	宇治市の写真資料 3	2011年(平成23)
収蔵資料調査報告書14	絵ハガキ 1	2012年(平成24)
収蔵資料調査報告書15	片岡道二家文書	2013年(平成25)
収蔵資料調査報告書16	宇治市の写真資料 4	2014年(平成26)
収蔵資料調査報告書17	京都社寺境内図	2015年(平成27)
収蔵資料調査報告書18	戦争関係資料 2	2016年(平成28)
収蔵資料調査報告書19	宇治茶の民具	2017年(平成29)
収蔵資料調査報告書20	宇治郷の古文書	2018年(平成30)
収蔵資料調査報告書21	上林味ト家文書	2019年(平成31)
収蔵資料調査報告書22	宇治茶の引札	2020年(令和2)
収蔵資料調査報告書23	尾崎坊家文書	2021年(令和3)
収蔵資料調査報告書24	吉田初三郎関係資料 上	2022年(令和4)

* 7までは、『収蔵文書調査報告書』として刊行した。

収蔵資料調査報告書25

吉田初三郎関係資料 下

2023年(令和5) 3月31日

編集・発行 宇治市歴史資料館

〒611-0023

宇治市折居台 1-1

TEL (0774)39-9260 FAX (0774)39-9261

E-mail : shiryokan@city.uji.kyoto.jp